

季刊 史料と伊能図

伊能忠敬

研究

一九九七年秋季 第一三號



伊能忠敬研究会

表紙図解説 徳島大学附属図書館蔵 伊能大図(部分)

徳島大学附属図書館は「豊前国沿海地図」と題して、文化八年に提出された九州第一次測量の際の大図とおもわれる3舗(下関、中津、別府)を所蔵している。中津、別府は豊前国ではないが、諸侯に贈呈された伊能図には、もともと名称がなく、受け入れた側で適当な名前をつけられることが多いので、受け入れに際して誤って付けられた名称であろう。

本図は中津の図の一部、豊後高田付近である。地勢の全容、海岸線の形状が絵画的にリアルに描かれ、測線の経路は明瞭である。彩色は文化六年提出図の傾向とよく似ている。

折本で、保存が非常によい針穴本である。徳島藩主・蜂須賀家の旧蔵品で、一八五三(昭和二八)年に徳島大学にはいった。

同大所蔵の蜂須賀家旧蔵の文化元年の沿海地図中図、文化四年の畿内、中国沿海図中図、文化六年の四国沿海地図中図、文化八年の九州第一次測量地域中図と一括保存されている。なぜ徳島侯が豊前・豊後図を所望したかに疑問が残るが、九州第一次測量完了時点で、伊能隊からそれまでの途中中図とあわせて謹呈されたものであろう。最終版大図とは図の分割が合わないが、大図の現存数は少ないので貴重な存在である。

(渡辺)

(題字は忠敬の筆跡)

目次

(表紙写真解説) 目次

ロマンチックな男	古賀 伸雄	1
歩測達人に選ばれて憶う	神戸 信和	2
徒歩で日本横断	岡部 孝子	4
お知らせ1		
都民カレッジ第IV期講座	前田 幸子	7
富岡美術館 冬季展	浅井 京子	7
伊能忠敬キャンペーン	編集 部	8
出版パーティと前夜際に参加して	首藤 郁夫	9
史料紹介		
伊能家文書紹介	安藤由紀子	10
●お信さん	伊能 陽子	14
●箱訴状		
地域史料	伊藤 栄子	18
徳山藩御用絵師朝倉湖内(南陵)のこと		
お知らせ2		
例会から新語流行のきざし	堀田 希一	21
伊能忠敬の足跡に迫る	(日本経済新聞)	22
伊能忠敬の大図写本43枚発見	(朝日新聞)	23
連載・第六次測量日記	佐久間達夫	24
伊能図探究		
十三		
伊能図見て歩き	渡辺 一郎	28
入会案内・投稿規定・編集後記		33

ロマンチックな男

古賀 伸雄

伊能忠敬―ご存じ「日本を測った男」である。しかもその偉業を何と五十五才から始めた男であった。日本中を十六年間、四千万歩も歩き続けた愚直な男である。千葉県佐原の伊能家の婿養子になり、必死に働いて伊能家を盛りたてた莫大な財産と信望を得た第一の人生。

そして隠居をして江戸に居を構え、子供の時から興味をもっていた暦学の勉強を始め、全国測量を成し遂げた第二の人生。その佐原と浅草に二つの墓をもつ男。まさに伊能忠敬は一身にして二生を生きた男なのである。

前半生で人間としてやらなければならぬ事をきっちりやり終えたと、後半生は自分が本当にやりたかった事に全身全霊を傾け、人生を賭けていく。これこそ男のロマン、理想の人生ではないでしょうか！

戦後五十年、日本は世界が羨む経済発展を成し遂げ、私達日本人の生活も豊かになりました。しかし心の豊かさはどうでしょうか？ 反比例するかのようになくなってきてはいませんか？ 理想やロマンという言葉は死語と化してはいませんか？ まさに日本は今、世紀末を迎えているといっても過言ではありません。

三年後の西暦二千年、伊能忠敬が測量を開始して二百年を迎えます。

目先の利益にとらわれず、五十代半ばからの第二の人生を熱く燃焼させ、まさに国家百年の計に寄与する大事業を自分の足で歩いて成し遂げた、途方もなくロマンチックな男、伊能忠敬。

高齢化社会に突入し、第二の人生を漸く、しかし切実に考え始めた現代人の為に、すっかりビジョンを失ったこの国の為に、今こそ共に伊能忠敬にスポット・ライトを当てようではありませんか！

江戸東京博物館、映画、演劇、伊能忠敬の道・全国ウォークと、各プロジェクトで行う各イベントすべてに連動性を持たせましょう！

そして、一大「伊能ブーム」を巻き起こしましょう！

時代は今、まさに「伊能忠敬再発見」の時を迎えようとしているのです！

(こが・のぶを 劇団俳優座代表取締役)

歩測達人に選ばれて憶う

神戸 信和

伊能忠敬研究一九九七年冬季号を受けとったのは九七年二月初旬であつたと思う。早速頁をめくってみると、日本計量史学会副会長岩田重男先生の「第一回歩測実験について」、編集部による「第一回例会歩測演習の結果発表」の記事。文章を見てみると、「歩測名人」、続いて「歩測達人」が並び、下に何人かの氏名が書かれ、私の名前があるのに気が付いた。名前をみつけて私の興奮は始まり、文章を改めて読み、九六年六月の第一回例会における、富岡八幡宮から間宮林蔵墓まで、約一・六キロの歩測演習の際の実験データの解析を岩田先生にお願いした結果のレポートにもとづいて、伊能忠敬研究会の理事会が協議した結果、私は幸い「歩測達人」の一人に選ばれたということである。興奮は次第に喜びに変わっていった。岩田先生の文章も何度となく読ませていただき「伊能忠敬研究会により行われた第一回歩測実験は、日本の計量史上あらたな一頁を加える壮挙になった」と述べておられることも驚きである。

私は歩測達人に選ばれたことの意義を考える時、伊能忠敬が日本地図の完成にそそがれた並々な努力はもとより、その当時の測量手法を吟味し、選り抜かれたものであることに気がつき、歩測も重要な手法であつたのだ。渡辺一郎先生も強調しておられるように伊能忠敬の生き方をあらゆる角度から考察し、再発見し、日本の学校を含めた広義の生涯学習社会の中で生かすよう努力し、工夫し、実現することこそ、伊能忠敬研究会をより発展させることができると思う。

さて、私が歩測達人に選ばれた因果関係について、ご参考までに書き記したいと思う。私が『歩測』を学んだのは、東京大学理学部地質学科二年の学生のころ、すなわち終戦の翌一九四六年進級論文のフィ

ルドに選ばれた山梨県西八代郡久那土村で故大塚彌之助先生の御指導によるものであつた。地質学の野外調査研究で七ツ道具と言えば、クリノメーター・ハンマー・ルーベ・巻尺・矢立て（現在はマジックペン）・定規・野帳及び地形図であろう。まず岩石・鉱物・化石などの観察、採集という初歩的とは言え、これなくしては地質学の研究は成立しないであろう。この単純で重要な行為により、すなわち標本を採集し、観察事項を科学データとして記録し、保存するために、その当時は地理調査所、現在は建設省国土地理院発行の各種地形図を用いている。このような地形図に、観察・採集地点をプロットするだけでなく、さらに詳細に記録を保存するために用いた手法が『歩測』であり、『歩測』を用いて「ルート・マップ」を作成することである。

大塚先生がつくづく、『歩測』が正確になればなるほど、出発地点から「ルート・マップ」を作成しながら出発地点に戻る場合に、その地点がより近づいてくるものだ」と言われた。このお言葉はそれから五十年がたった今日、なお私の脳裡に鮮明に刻まれている。

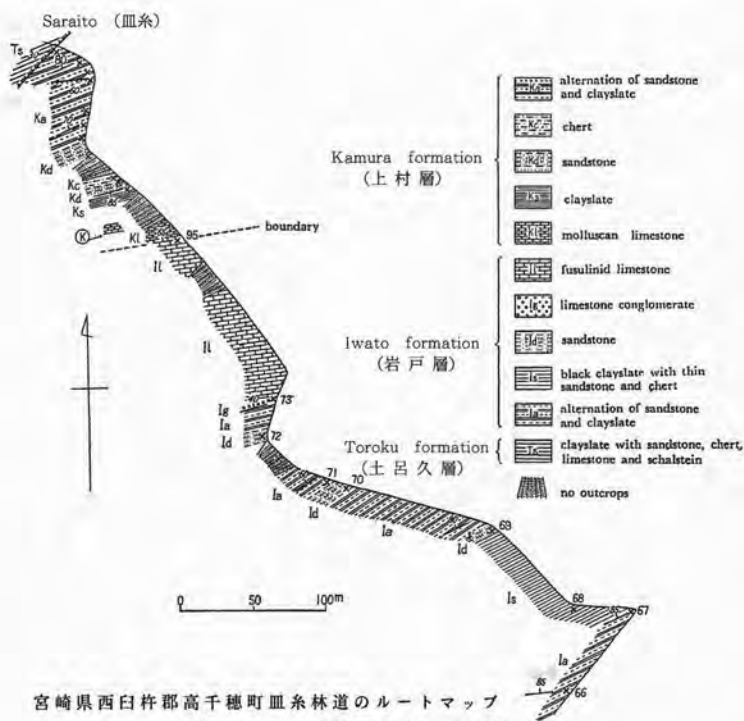
このように『歩測』『ルート・マップ』の手法は地質学の研究には必須であることを学び、大学を卒業し、明治十五年創立の通商産業省工業技術院地質調査所に勤務することとなり、五万分の一地質図作成の調査研究を担当することとなった。地質調査所は日本国土の基盤地質を明らかにするという使命があり、地質図作成には国土地理院発行の地形図を使用し、地質図は地形図上に印刷され、説明書である地域地質研究報告書と共に、地質調査所によって公刊されている。一九八七年の定年までの三十七年間の大部分（約八年間位は地質標本館管理業務）を地質図作成のための調査研究業務に携わり、野外地質調査は約二千日に及んでいる。（図参照）

地質図作成には地形図を使用するばかりではなく、重要な観察・採集には『歩測』を多用し、「ルート・マップ」を作成している。これを地域地質研究報告書の中に引用し、掲載することもある。今まで地

質調査の中で『歩測』を実施することはあっても評価をうけたことは全くない。しかしこの度、思い掛けず伊能忠敬研究会により「歩測達人」の称号を頂き、ただただ感謝のほかはない。この事は、私が申し上げるのは少々おこがましく、大げさではあるが、五十年間に及ぶ『歩測』経験が実証されたこととして大変嬉しい。勿論、誤差が零ではなく、一・三二％であることも記憶に留め、不断に修練の要あることを示唆しているものと冷静に受け止めている。

私が「歩測達人」に選ばれたのは伊能忠敬研究会の会員であるからに他ならない。会員である所以は、『歩測』を始めるもつと前の一九三九年に遡る。その年、私は伊能家七代目当主の故伊能敬氏（武蔵大学名誉教授）と共に、七年制武蔵高等学校専科に入学した。以来、伊能家七代目の伊能氏よりむしろ友人として付き合い合っていた。私が定年後、武蔵高等学校・中学校で非常勤講師として地学を担当することになって早々、伊能氏を武蔵大学の研究室に訪ねた時、伊能家所蔵の量大ほどに張り合わせた「地球図」をみせられ誰かに観て貰いたいと相談をうけ、故矢沢大二先生（都立大学名誉教授）を一九八九年五月十一日、伊能氏の研究室に御案内した。矢沢先生の計らいにより、地学雑誌九九巻三号（一九九〇年）の口絵・伊能忠敬筆「地球図」としてカラーで印刷公表され、同号の短報・資料に織田武雄先生は「伊能忠敬の「地球図」」と題して解説された。このような関係もあって、その後、武蔵高等学校の伊能洋先生から伊能忠敬研究会創立のお話を伺い、入会させていただくことになったのである。

（かんべ・のぶかず 元通産省工業技術院地質調査所地質標本館長）



宮崎県西臼杵郡高千穂町血糸林道のルートマップ
(神戸信和 1963年)

徒歩で日本横断

岡部 孝子

一九九七年八月十六日～二十五日、夫と私は東京都中央区晴海埠頭から新潟県柏崎市まで九泊十日の日本横断の旅に出た。「太平洋の水を日本海に注ぐこと」が目的である。まず日本列島を地図で眺める。太平洋側⇨三陸のリアス式海岸・九十九里浜・駿河湾、日本海側⇨新潟県直江津・柏崎が候補にあがる。一番くびれた短距離伊勢湾⇨敦賀湾、逆に長距離のフォッサマグナ中央構造線も考えたが、結局晴海から柏崎まで、そして夫の名(長栄)の韻をふみ「高野長英逃亡路を辿る」とサブタイトルをつけ、群馬県の谷川連峰の鞍部にある清水峠を越えることにした。日本の自然や人々の生活は昔から峠と深く関わっており、「峠越え」にはそれ自体ロマンがあるが、幕末の蘭学者高野長英は投獄⇨逃亡という形で新しい日本の未来を切り開こうとしたのではないかと解釈している。私達夫婦はそんな大義名分を背負うこととなる。

準備として図書館で参考書を借り、各県・市の観光課、谷川岳登山指導センターから情報収集をする。地図は、土合⇨清水は茂倉岳と巻機山の二万五千分の一を用意し、その他は五万分の一の広域道路地図を二十八枚道順に沿ってコピーする。旧道を含めルートを示す赤で記し、距離数をマップメジャーコンパスにより算出し、まず土合と清水に宿を、その他は起点・終点までを逆算して宿をとる。荷物は「重さ」を感じない五キログラム以内(峠越えは二食の弁当と水が加わる)、着替えは最小限、雨具、地図、方位磁石、なによりも大切な足の疲れを

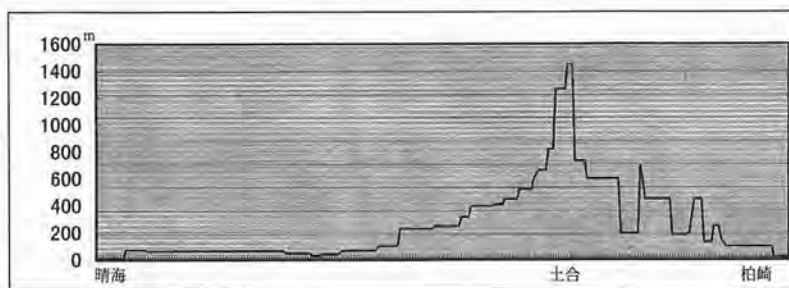
とる青竹踏み(携帯用に半分切断)、ゴルフボール一個、子供達が贈ってくれた「足ゆび元氣くん」を荷物に加える。

晴海埠頭で太平洋の水を汲み、長英が投獄されていた中央区日本橋小伝馬町の牢屋敷跡へ行き、火付けの真似事なる儀式をし(長英は火付けをさせ逃亡)出発。旧中山道沿いに板橋宿を経てその日は大宮泊。その後は深谷、北上して前橋、沼田、土合、清水峠を越え、清水、十日町、月湯女、柏崎に至る三百キロ余の行程を九日間歩き続ける。深谷までは国道十七号と交差しながら旧街道のたたずまいが残る平坦な道、やがて農道・県道・国道を歩きながら緩やかなアップダウンを繰り返し前橋へ、沼田から土合は山間を縫うように上っていく。そして一気に清水峠を越え、栃窪峠・仙田トンネルを経て日本海までいくつも山越えをしながら下っていく。

巢鴨とげぬき地蔵(高岩寺)では、まずタオル(以前はタワシ)でお地蔵さんの足を洗い無事を祈る。大宮は通勤圏なのに宿泊するおかしさを感じた。改修中の多聞寺の住職に県天然記念物のムクロジの実を頂きお守りとし、「家内安全」住所・氏名を筆書きした屋根瓦を寄進した。特別宗教心が強いという訳ではないが道端に風雨にさらされて丸みを持った道祖神を見つけると自然に手を合わせ旅の無事を祈る。深谷では葱畑・水田の間を吹き抜ける草いきれと爽やかな風を交互に肌で感じる。上武大橋を渡りいよいよ上州入り。木陰を求め神社仏閣で休憩をとることが増える。先人の知恵と思うが折良く点在している。利根川では胸まで清流につかりながらのおとり鮎漁を見ながら桑とコンニャク畑の多い群馬県赤城村へ入る。道路工事の迂回で「一ツ目の信号・十五分程先」と地元工事人の説明が車社会の説明だったことに

気付いたのは、一時間三十分・六キロ余で信号を見つけた時だった。水上で出会ったお爺さんは、「昔、清水峠を越えたが大事^{オキコト}だった。」と話をしてくれたが足腰は都会の老人とは鍛え方が違うと見受けた。一番きつかったのは清水峠越えである。湯檜曾川沿いに歩き始め、地図と方位磁石、地図上と実際の送電線を目印とし、事前に入手していたコースタイムを参考に、常に自分の位置を確認しながら登っていく。誰一人会うこともなく途中の丸木橋・沢の出合いの足場の悪さに慎重になる。つづら折りの山道ではコースタイムの信憑性を疑う。清水峠から群馬県側に谷川岳東面を見ると、昔の旅人達はどんな思いでここに立ったのだろうと思いを馳せる。上越国境を越え感無量である。下りは昔、米を運んだ謙信尾根(十五里尾根)をとりクマザサの道からブナ林へ。日本は森林の国と実感するほど山に囲まれ、峠を越えたら日本海が垣間見られると思った期待は大はずれであった。登川の清風で顔を洗い青空に思いきり手を広げ爽快な気分。清水の民宿「雲天」では魚沼新報の記者の取材を受け、山菜料理とビールそして銘酒八海山が格別美味しかった。天満宮で朝食のおにぎりをほうばっている時、自家製の漬け物を持ってきてくれたお婆さんは、五十年前は清水までの道を歩いたが、今歩く人はいないという。栃窪峠では、農作業に出かける軽トラックの女性は、窓を締め冷房をきかせて長袖に日焼け防止帽を頬までかぶっている。農業は機械化され、米の穂先は機械に刈り取られ袋詰めまでされ、茎は切断され田に肥料として残される。現代農作業の姿を見た。平成四年の地図では集落・道路があるにもかかわらず、廃村部落になり道に迷うとの地元の人忠告でルート変更。人が生活しないと道としての機能はそんな短期間に失われるのだろうか。タバコ畑にいたお婆さんが、若い頃マムシを一年に十二匹捕まえその翌年にはマムシにかまれた話をしてくれた。真夏の三十度を越

ルートと高度



える暑さ、コンクリート舗装の照り返しと車社会の産物の排気ガスの中の国道歩きは体力を消耗したが、逃げ水の見えた道路の脇では稲穂の揺れ戻りが妙に心地良かった。

多くの人々と出会ったその土地土地の思い出は尽きない。柏崎の海岸の波打ち際に太平洋の水を注いだこと、目的をもって歩き通したことの達成感、そして「峠を越した」感慨は忘れられない。今回の自分の歩いたルートと等高線を基にパソコンに入力し図を書くとなりのようになつた。無味乾燥の折れ線であるが歩き通した私には、一つ一つの凹凸の名前が浮かび風景を思い出す。

いつの日か佐久間達夫氏の「新説・伊能忠敬」の宿泊地を歩いてみたい。実現の暁には、日本地図のどこを見ても風景を思い浮かべられる私となつていくに違いない。

前頁の原稿と一緒に、岡部さんから送っていただいた新聞記事です。東京から歩いてきた二人に、宿の人も新聞社も驚いたでしょう。ご諒解を得て、そのまま掲載いたしました。

(編集部)

夏に出会ったこんな話 ①

海を目指して歩いた2人

「遠くから歩いて来た人たちがちょうど今、うちに着いた所だて、すぐ来てみて」——塩沢町清水、山の宿雲天の小野塚久子さんから、こんな電話が入ったのは先月二十一日夕方のことだった。

「遠くから歩いて来た人たち」とは東京都足立区千住に住む岡部長栄さん(四六)、孝子さん(四七)夫妻。長栄さんはコンビニエーター関係の仕事に携わるサラリーマン、孝子さんは専業主婦。

岡部さん夫妻が足立区の自宅を出発したのは十六日。

その日、まず晴海埠頭に行き、フィルムケースに太平洋の水を汲んだ。「この水を日本海に注ぐこと」が今回の旅の目的。準備は万端、「さあ、出発だ」。

その日は大宮(埼玉県)前橋(群馬県)、沼田(同)、土合(同)で泊った。そして、清水峠を越え、塩沢町清水にやって来た。

毎朝、お日様が昇るころには出発して、日が暮れる前に宿泊所に入る。二人が背負ったリュックサックの中には食料、着替え、日記帳などが入っていた。

「歩いていると町の臭いが全く違うことに気が付くんですよ。これは自動車で走っていたら、全く気が付かないでしょうね。それから、道端に道祖神があると自然に手を合わせたくなるんです。旅の安全を祈るというか。二人は穏やかな口調でこう話した。

そして、二十二日早朝、清水を出発して十日町、高柳、柏崎と歩き続けた。今回、九日間の旅で約三百七十キロを歩いた。

岡部さん夫妻はこれまでも、一九九五年(平成七年)には、十六日間かけて

伊勢参りを。そして、塩の道(糸魚川―松本間)も歩いた経験を持つ。先月二十六日午後三時過ぎ、長栄さんから電話が入った。二十四日に無事、柏崎市に着きました。夕方、海岸に出てフィルムケース

魚沼新報

創刊明治34年1月1日

発行所

〒949-60

新潟県南魚沼郡六日町

大字六日町1993番地

魚沼新報

☎(0257)72-2005

FAX (0257)73-3384



地図を広げ、行程を説明する岡部長栄さん(右)と孝子さん
(8月21日午後6時ごろ、塩沢町清水・雲天で)

に入れて持って行った太平洋の水を日本海に注ぎ、目的を達成しました。二十五日午前七時、鈍行列車に乗って出発、午後二時には自宅に着いたという。

二人は雲天の大広間でこう話し、うなぎき合っていた。「もっともっと、歩く人が多くなればいいと思います。今の道路は人が歩くためではなくて、自動車が走るためにあるような気がします。歩いたから得られる、得られたものがたくさんあると思うんです」。

暑かった夏も、終わりを告げようとしている。厳しい日差しの下、暑い夏よりも熱く燃えた人たちがいた。清々しい風のような出来事もあった。去り行く夏を振り返りながら、あの時を思い浮かべてみる……。

お知らせ 1

都民カレッジ第IV期講座

「人生を二度生きた」忠敬の生涯とその業績について、各講師が資料に基づいてそれぞれの専門分野から多角的に講義します。

講座名 『伊能忠敬再発見——伊能忠敬の四千万歩をたどる』

内容 「忠敬の生涯」「伊能図について」「見学会（深川地域）」「全国測量の旅」「測量を支えた人々」等 全一〇回

講師 渡辺一郎（伊能忠敬研究会事務局長） 小島一仁（佐原市史

編纂委員長） 佐久間達夫（元伊能忠敬記念館館長） 伊能陽

子（伊能家） 安藤由紀子（元国会図書館憲政資料室）

日時 一九九八年一月一〇日（土）～三月七日（土）（全一〇回）

毎週土曜日 午後三時～午後四時三〇分（各回九〇分）

場所 「都民カレッジ」丸の内キャンパス（千代田区丸の内三ー

五ー一 東京国際フォーラム地下一階 JR有楽町下車3分

受講料 一三、〇〇〇円（全一〇回 見学会を含む）

申込 十一月一八日から電話で予約受付（先着順）定員約七〇名

詳細は募集要項（十一月初旬から配布）をご覧ください。

問合せ先 丸の内キャンパス事務局 〇三ー三二一五ー四三二一

（都立大学 前田幸子）

渡辺一郎さんが『伊能測量隊まかりとおる』を出版

十月初旬、事務局長の渡辺一郎さんが、伊能図と伊能測量の関係を縦軸に、史実にもとづく伊能隊の測量風景を横軸にした本を出しました。

A5版三二〇頁二段組の大冊で内容は濃密ですが、出足好調です。海

外の伊能図のカラー版も収載。（NTT出版刊、税別三八〇〇円）

富岡美術館 冬季展「忠敬・海舟関連文書」

近代日本の誕生に大きなかわりをもった勝海舟、部分的には昭和前半期の地図にまで影響を与えた『大日本沿海輿地全図』を作った伊能忠敬、この二人にかかわる文書を通して、人とその時代をみていこうとする展覧会です。

測量のためにほぼ全国を踏破することに使われた忠敬の後半世を支えたのは、名主後見・名主・村方後見として活躍した前半世の佐原時代であったといわれています。世田谷の伊能家に伝わる文書類を中心に、佐原時代の忠敬の仕事ぶりを、また、測量をしながらどんな作業をしていたのか、完成した地図になる以前の仕事を知らずかりとなる資料などを展示いたします。「海岸写生図巻」や「鹿絵図」は本図を作るための資料でしたが、絵画的魅力もたえています。一方、忠敬の妻・娘・嫁といった女性たちの手紙は手跡の美しさとともに、人間忠敬の一面を生きて伝えていきます。

同時に当館所蔵の勝家伝来文書（折本二冊）を展示いたします。

講演会：「伊能忠敬と女性たち」 安藤 由紀子氏

二月廿八日（土） 一時半～三時

当館二階学習室（定員四十五名）なお一月三十一日には「勝家伝来文書について」の講演会があります。

会 期：一九九八年一月十日～三月十五日

午前十時～午後四時 月曜日休館 一般五百円 小中高生三百円

富岡美術館（大田区山王二一三三ー三三〇三ー三七七一ー一〇五四

JR京浜東北線 大森駅西口下車徒歩五分）

（富岡美術館学芸員 浅井京子）

伊能忠敬キャンペーン

①

平成の伊能キャラバン隊

ニッポンを歩こう

主催

社団法人日本歩け歩け協会

朝日新聞社

考証

伊能忠敬研究会

期間

1999年1月25日

↓

2001年1月1日

伊能測量隊が歩いた道を全国の老若男女がリレー式に2年間で踏破する。

47都道府県全てを巡り、訪問する市町村は840、その人口総計は5269万人にのぼるという20世紀から21世紀へのかけはしとなる国民的イベント。主催・運営する社団法人日本歩け歩け協会は環境庁所轄の公的団体で、全国220団体が加入、正会員18000名の世界でも有数のウォーキング団体。本年10月には埼玉県で第一回世界ウォーキングフェスティバルを主催する。

江橋慎四郎会長（東京大学名誉教授）。

②

伊能忠敬を主人公とする

映画・演劇・TV等

主催

俳優座

朝日新聞社

協力

伊能忠敬研究会

期間

・映画 **四千万歩の男**

撮影 98年9月→99年4月頃

上映 99年9月→2000年2月頃

・演劇「伊能忠敬物語」

上演99年9月→2000年2月頃

・TV「ニュースステーション」など随時

歴史と実績を誇る名門劇団俳優座が、55周年記念企画として伊能忠敬を大々的に取り上げるようになった。

主演伊能役はご存じ加藤剛が演じ、共演には俳優座ゆかりのベテラン、若手俳優たちがオールスターキャストで臨む。映画の原作は井上ひさし氏。演劇は新国立劇場（東京）、新歌舞伎座（大阪）、博多座（福岡）の予定。

③

四千万歩の男

伊能忠敬展

主催

江戸東京博物館（東京都）

朝日新聞社

協力

伊能忠敬研究会

期間

1998年4月21日

↓

1998年6月14日

イギリス、フランス、イタリアなどに散っていた伊能図が史上初めて祖国日本に帰り一堂に会するなど、伊能の業績・人間像などを立体的に検証する画期的に検証する画期的展覧会。井上ひさし氏、加藤剛氏のトークや日本歩け歩け協会による歩測大会など、盛りだくさんの協賛企画がある。

TADATAKA
INOH

出版パーティと前夜祭に参加して

首藤 郁夫

『伊能測量隊まかり通る』出版パーティと、「伊能忠敬再発見キャンペーン」前夜祭は、十月十三日、日本プレスセンター十階のレストラン「ALASKA」で、午後六時半から約二時間、盛大におこなわれました。素晴らしい夜景、ピアノの生演奏、測量隊御用の旗が渾然と調和して、雰囲気盛りあげるのに十分な効果がありました。

会の進行にはアワ・プランニング佐藤社長があたり、渡辺さんの



著者の出版記念と、来年江戸東京博物館での「伊能忠敬展」、歩け歩け協会と朝日新聞社主催の伊能キャラバン隊「ニッポンを歩こう」(一九九九～二〇〇一年)、俳優座による伊能忠敬を主人公に映画・演劇・TVで採りあげる「伊能忠敬キャンペーン」が簡潔に紹介され、続いて次の方々からご祝辞をいただきました。

野々村邦夫 国土地理院院長

金子 智一 日本歩け歩け協会名誉会長

森 英介 自民党衆議院議員

辻 哲夫 厚生省政策課長

谷田川 元 千葉県会議員(佐原選出)

古賀 伸雄 劇団俳優座代表取締役

滝田祐介・岩崎加根子・弓場さおり三氏も一緒に登壇

岡部 恒雄 江戸東京博物館副館長

門垣 逸夫 朝日新聞社文化企画局長

また、瓦力建設大臣、中村宗敏日本古地図学会会長からの祝電の披露があり、伊能洋・陽子ご夫妻のご紹介がおこなわれました。

乾盃のあと歓談に移りましたが、出席者約二百名、わが伊能忠敬研究会から三十五名あまりの参加があった由です。

さらに、会なかばすぎには

弓削忠司 佐原市助役

八幡圭計 渡辺さんのNTT時代の同期生

のお二人から称讃・激励があり、終りに渡辺さんご夫妻が登場、渡辺さんから、電電公社時代に日本全国をデータ通信網で覆う仕事に伊能忠敬の業績を重ねることから伊能図とのかかわりが生れたこと、三年前には、こうした事態になるとは全く予想もしなかったこと、よくきかれる忠敬観では、目先の損得にこだわらない人、運の強かった人と実感していると述べられ、終りに今宵の盛会にお礼の言葉を添えられました。大きな拍手で気持ちのよい会は無事お開きとなりました。

伊能家文書紹介六 その一

お信さん

安藤 由紀子

『むかしばなし』

寛政二年六月、桑原信さんは伊能忠敬と結婚した。忠敬四六才、再婚である。彼女は忠敬の長女「稲」より少し年下と思われる。なぜそう推定できるのか。ここで一人の女性に登場してもらおう。

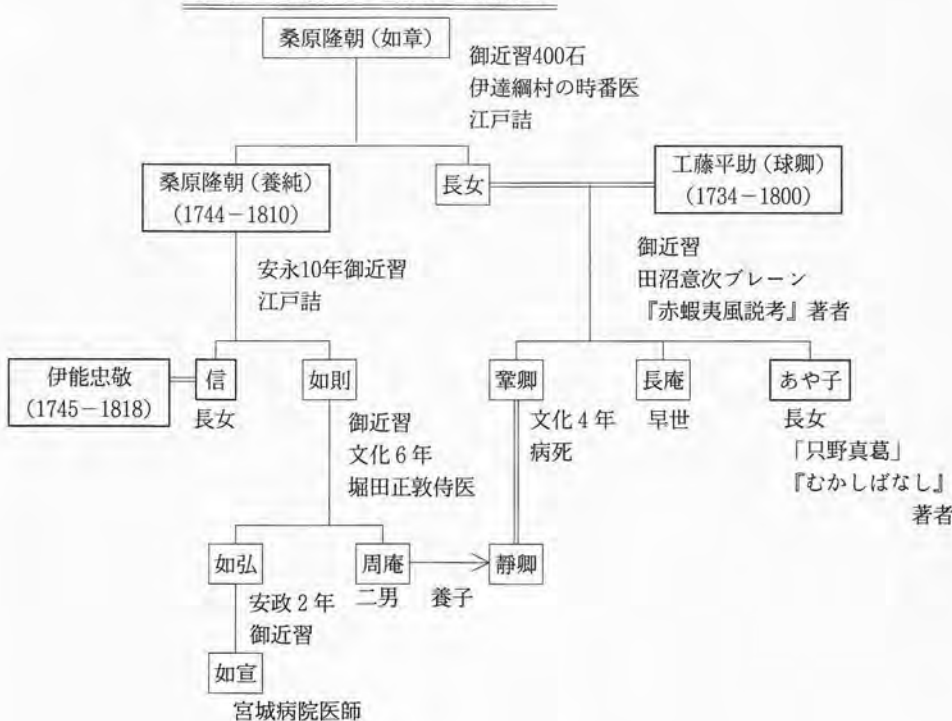
平凡社の「東洋文庫」シリーズ(四三三)に、『むかしばなし』という本がある。「只野真葛」という筆名の、仙台藩士の妻が書いたもので、「天明前後の江戸の思い出」という副題がついている。江戸後期の代表的文人滝沢馬琴が、「紫清二女にも勝る才女よ、烈女よ、」と賞賛し入門を許したみちのくの女性が、真葛さんである。

本名は、結婚前の姓で工藤あや子、仙台藩藩医で意見書『赤蝦夷風説考』を田沼意次^{オキナ}に提出し一躍時代の寵児となった工藤平助(球卿)と、桑原隆朝の姉との間の長女である。宝暦十三年生れ、忠敬より十八才年下、奇しくも長女稲と同じ年である。

父工藤平助は医師として伊達家につかえる一方、政治家でもあり、諸大名から博徒まで出入りする広大な屋敷をかまえ、玄関には進物が、座右には千両箱が積まれていたといわれる。

田沼時代は去り、工藤家の没落が始まった。直系の男子は絶え、あや子にも子供がなく、母方から桑原隆朝の孫が入って後を継いだ。つまり工藤家は桑原家に乗っとられた形になってしまったのである。只野家に嫁していた真葛さんの悲しみは大きかった。『むかしばなし』

伊能・桑原・工藤家 関係図



は、才能に溢れ、時流の先の読める、太っ腹な父平助への賛美と桑原家に対する呪詛に満ちている。
人脈が複雑になったので、ここで三家の関係を图示しておこう。

つまり、お信さんと真葛さんは、従姉妹どうしということになる。
『むかしばなし』には、なぜかお信さんについての言及はないが、次のような記述があって、父桑原隆朝の年齢がわかる。

「この折りが桑原おじさまの大ふさぎの時なり。(家運隆盛でなかった頃の意) おじ様は父様に十おとりてあれば、母様婚礼の時分は十五六なるべし」。工藤平助は享保十九年の生まれだから、桑原隆朝は延享元年(一七四四)生れで、忠敬より一才年上だったことになる。忠敬は十九才で長女稲を得た。お信さんも隆朝の長女だが、医師は結婚が遅い傾向があるので、稲より少し年下とみるのが妥当だろう。四六才の忠敬は、二五、六才のお信さんをお嫁さんにしたのだ。そんなにもてた人なのかなあ、と肖像画をつくづく眺めてしまう。

ちなみに仙台藩には、江戸詰と国元をふくめて、一二〇人もの藩医がいたが、大槻玄沢の日録『官途要録』の中に、同僚全員の名をその格の順に書き出したものがある(天明八年八月条)。それによると、藩主・夫人・公子・公女などを診る格の高い「御番医師御近習」三二人の四番目に「本道・工藤平助」、十九番目に「本道 常詰・日本橋大工町 桑原隆朝」、三十一番目つまりビリから二番目に「拾五人分(扶持のこと) 十両 外科 江戸常詰 大槻玄沢」とある。

寛政二年の伊能本家

仙台藩医といっても桑原隆朝は江戸詰、多分江戸に生れ育ったはずのお信さんが佐原の伊能家に入った時、どんな家庭が待っていたのだろうか。佐原には、忠敬の書簡と短い「過去帳」の記載と小さなお墓の外には、故意に拭ったかのようにお信さんの資料は残っていない。これもまた謎の一つである。

伊能忠敬の年譜から、家族に関する部分を抜粋してみた。
宝暦十二年(二〇) 伊能家へ婿入り。妻伊能みち。

十三年(二九) 長女稲出生。

明和 三年(三三) 長男景敬出生。

六年(三六) 次女篠出生。

安永 一年(三八) 「河岸問屋一件」訴訟に村を代表して出頭、勝訴。

七年(三九) 妻みちと奥州へ約一か月の旅行。

天明 一年(三七) 本宿組名主拝命。

三年(三九) 利根川大洪水。浅間山大噴火。堤防修築に活躍。救

民。地頭より苗字帯刀許可。妻みち没。

四年(四〇) 村方後見、拜命。

六年(四二) 救民。江戸へ残米回送し巨利を得る。次男秀蔵(庶

出) 出生。

八年(四四) 酒造高一四八〇石。三男順治(庶出) 出生。

寛政 一年(四六) 三女琴(庶出) 出生。

二年(四八) 仙台藩医桑原隆朝の長女信と結婚。最初の隠居願を

出し、不許可。

四年(五〇) 江戸店の盛右衛門に盛んに暦数書を注文。

忠敬は伊能みちとの間に三人、三九才で彼女に死別してから庶出の子を三人得た。母は、伊能家の番頭柏木久兵衛の娘という説もあるが、はっきりしない。そしてこのあとお信さんと結婚したのである。

この年譜から、寛政二年、彼女が伊能家に入ったときのことを想像してみよう。

村方後見という村役人最高の役職にあり、酒造・米取り引きなどで家運隆盛だったことが分かる。長女稲(二八)と婿の盛右衛門は伊能

の江戸店を、鎌倉河岸で経営していた。体の弱い長男の景敬（二五）はまだ独身で、江戸店（計二軒あった）と佐原本家の間を行き来して名主業や諸経営の修行中だっただろう。次女篠は嫁に行き、二年前に亡くなっている。以下庶出の次男秀蔵（五）・四年後に死んでしまう三男順治（三）・三女琴（二）は、佐原本家にいたはずである。下男下女から従業員まで酒造期には五十人は下らない大所帯だった。後に病気で江戸へ行ったお信さん宛の忠敬の書簡の中に「お琴の病気はすっかり全快したから、安心してください」とあるので、もちろん女中は大勢いただろうが、義理の娘を心配する優しい継母だったのだろう。

「瓦」と「すだれ」

お信さんに言及した忠敬の書簡は、全部で七通残されている。年代推定は非常に困難で、妥当と思われる線で並べてみた。間違いはあるかもしれないが、これも一つの仮説としてお許し願いたい。（刊本の資料紹介は、以後口語訳でしてゆくつもりである。）

資料 一 一五〇 伊能忠敬書簡 千葉県資料・近世篇

加納三郎次（婿・伊能盛右衛門）宛

加納屋新兵衛（第二江戸店の経営者）宛

寛政三年^(戊)五月十三日

（前略）十日頃には積み出すと、瓦屋長兵衛から知らせがあった由、急いで小船でなりとも積み出し急着するよう手配してください。（中略）江戸で瓦葺きの上手な職人を決めておいて、こちらから知らせ次第、佐原へお下しください。瓦の下土も取り寄せておきます。

先日お信がお便りした由ですが、納戸の日除けの「すだれ」、二間のを二枚、丈は三尺か四尺のもの、座敷の奥が陰になればよいので、三、四尺でよいと思います。御地（江戸）には、「よしず」をきれいに加工したものもある由、「すだれ」は六尺のものが一枚三百文もするそうで、三尺にすれば、二枚で三百文であるでしょう。また竹のは「よしず」より安いので、やはり三尺丈の「竹すだれ」も二枚買って、ひさしの端と縁側の桁にかければ、よい日除けになるでしょう。

（中略）

全部で六百文ほど出せば、よいものが手に入るはずです。お世話ながらすだれ屋へ眺えてください。細くきれいに仕上がるように。（後略）

これが、お信さんが登場する多分最初の忠敬の手紙である。

忠敬さんはこの前後、さかんに屋敷の手入れをしている。土蔵、勝手、湯殿、雪隠など……。お信さんのために、「すだれ」も江戸製のしゃれたものを注文し、瓦も江戸から取り寄せ、職人も江戸から呼んだことが分かる。彼は若い奥さんのために、一生懸命だ。この「すだれ」の部分もそうだが、この手紙の後半を読むと、いかにも彼らしく、瓦の値段や品質に細かく目を光らせていて、酒造業にしても、米取り引きにしても、これなら成功するだろうな、と頷ける。

お信さんの病氣

残りの六通の手紙は、私の推定では、すべて寛政六年のものである。お信さんは、不治の病に罹ってしまった。翌年三月十四日には不帰の人になってしまう。

前掲の書簡からこの六通の書簡までの二、三年間、忠敬はきわめて

多忙だった。お信さんから桑原隆朝への手蔓るを得て、江戸に出たくてたまらない忠敬は、結婚した年の暮、領主津田氏に隠居願いを出した。津田氏は年中忠敬から借金をして、世話になっているので、今止められては大変である。そんな訳で、津田家が代替わりをしたという理由で許可しなかった。翌三年「家訓」を書く。これも江戸行き準備である。四年には、勝手向き援助の功により、津田氏は「三人扶持」を与えて懷柔を試みる。この頃盛んに江戸店の婿に、曆書を注文する。桑原氏から高性能の磁石も借りている。勉強もだいぶん進んだようだ。村政の面でも大忙しである。年貢関係の仕事はいつものことだが、『弱ものニハ強く、強ものニハ弱い御屋敷』だと憤慨しきりである。新橋をかける件で何年来の訴訟も続いている。強盗の嫌疑をかけられた村民も、「鬼平」こと長谷川平蔵に頼んで救ってやらねばならない。後に紹介するように、佐原では、大病のお信さんの側についてやることもできない有様であった。

資料二 一四六 伊能忠敬書簡

前掲書

(婿) 盛右衛門・お稲・お信宛

寛政六年七月十二日

(前略) お信のことお世話になります。暑さが退き次第、病状もよくなるよう願っています。容体、追い追い御知らせください。私は帰佐して良かったと思います。後悔はしていません。ただお信の苦勞が心配でなりません。(中略) 留守中長七、藤七などもよく勤めてくれて、蘭も元気に、だいぶん新芽をだして楽しみです。その外小庭を眺めても、久し振りのなで慰められます。(中略)

七月十二日

東河

盛右衛門(婿)殿 お稲殿

尚々、今日佐原は五つ半に少し雨が降りすぐ止み、四つ頃には照りだしました。でもこれ迄のような大暑にはならないでしょう。とにかく元気になるよう心掛けること。(中略) 御様子の良いときは、容体の手紙お待ちしています。気分の良くないときは、書かなくてもいいですよ。御面倒なときはくれぐれも、お文は御無用に。こちらのことは、少しも心配いりません。お琴もすっかり全快しましたから御安心ください。白木屋急便につき、早々御便りました。かしこ

お信殿

東河

寛政六年の晩春か初夏、病氣のお信さんに付き添って江戸へゆき、桑原宅へ預け、久し振りに佐原へ帰って来たことが分かる。お信さんへの直書の部分には、忠敬さんの、いじらしいばかりの心遣いがにじみ出ている。

寛政期、同世代の縁続きの女性が三人いた。文才のあった真葛さんのちに測量のマネージャーを一手に引き受けたお稲さん、病身で大所帯に嫁ぎ伊能忠敬と桑原隆朝をむすび、伊能図を世に出すきっかけを作ったお信さん。それぞれ懸命に、個性的な人生を生きた。

(この項つづく)

参考文献

- * 『むかしばなし』只野真葛 東洋文庫(四三三) 平凡社
- * 『官途要録』大槻玄沢 早稲田大学出版部 (影印本)
- * 『伊能忠敬書状』千葉県史料 近世篇

一五〇・一四六 伊能忠敬(三郎右衛門)書簡

箱訴状

伊能 陽子

寛政十二年閏四月十九日、忠敬は「高橋作左衛門弟子、西丸御小姓組番頭津田山城守知行下総国香取郡佐原村之百姓、浪人伊能勘解由」として、蝦夷へ向けて測量の旅の第一歩を踏み出した。

忠敬は天明三年、三八才の時、津田山城守から苗字帯刀を許されている。浅間山の大噴火、利根川の洪水による凶作の際に、名主として村のために大いに活躍をした褒賞である。勿論、長年にわたる財政面での貢献も含まれていたであろう。しかし、この苗字帯刀はあくまでも一地方所からの許しであって、身分は百姓浪人であることに変わりはない。蝦夷地測量の準備段階では、幕府御用人が「勘解由事百姓ニ候得ハ、陸地通行御証文之前例も無之……」と、陸地を行くことに難色を示したようである。尤も、これは陸地での器材運搬に費用、人手がかかること、どれほどの仕事ができるか見当もつかない老人である、など諸々の条件も重なってのことだが。

とにかく、初めての測量、そして作り上げた地図は幕府に認められ、続けて全国の測量にとりかかることになった忠敬には、公に通用する身分証明書が必要であった。それにかかわる「箱訴事件」である。

八代將軍吉宗は評定所前に目安箱を置き、これに訴状を投げ入れた庶民の意見を取り上げた。この直訴を「箱訴」といったが、住所氏名が明記されていないものは、焼き捨てられたという。そして、箱訴という、庶民が非常に苦しんだ揚げ句、大変な決意で直訴することと思っていたが、御政道に関すること、役人の不正について、また、訴

訟しても役人が取り上げず、長い間放置されているなどの件に限り、取り上げられたそうである。佐原村の百姓たちによる箱訴状は、「政道に関すること」現在では、褒賞の推薦ということであろうか。

世田谷の資料の中に、箱訴関係の書き付けが六通あった。佐原の記念館にも六通ほどあるが、内容はほとんど同様の下書き、写しである。手元の一通の包み紙には、後に書類整理をした祖母が書いたと思われる上書きがある。「有功院」は忠敬の戒名である。

史料一

A九〇（世田谷伊能家文書）

「有功院様御由緒書並ニ御内願筋

其外御届書後來為見合ニ相成候大切之書付入」

その一

差上申一札之事

津田山城守知行、下総国香取郡佐原村百姓源兵衛

外老人者、去々未年一二月、同村藤左衛門外七人者、去申年

正月申、三郎右衛門并親勘解由、先祖より申送り相守、村内

取計等宜鋪段申立、両度御箱訴仕候ニ付、右之もの共

御呼出御吟味有之、猶又、三郎右衛門儀も御吟味之上、左之通

被仰渡候

一、三郎右衛門先祖、天正年中、佐原村へ罷越住居仕候、已来代々

村方為ニ相成候儀を心掛、引続、勘解由儀、右申送り相守

村内困窮人等相憐、類焼ニ逢候ものへ米銭食類等合力

いたし、凶年又は出水等之節、村内は勿論近郷迄も夫食

貸渡し、或は合力いたし、貧窮にて年貢難納ものへハ

弁納之儀取計、米穀払底高値之節も、窮民救方之儀

品々心を用ひ、都て平日村内撫育之志し厚く、且三郎右衛門儀も

幼年より孝心にて、父之申教ニ随ひ、代々申送り相守、公儀を

重んじ、地頭所を大切ニいたし、平日人を勞り、村内貧窮ニて

年貢難納ものは弁納致し遣し、又は貧家之長病人産婦等へ

手当いたし、類焼之者を勞り、且、困窮にて可及潰ニ者、又は

荒地起返し等之手当として、積金之心掛等いたし、右体

先祖より数代、申送り相守、惣て村方為ニ成候儀共常々取計候段

寄特之志ニ付、為御褒美と、三郎右衛門へ御銀拾枚被下置

苗字ハ子孫迄相名乗、帶刀は其身一代御免被仰付

勘解由儀は、御銀拾枚被下置、苗字帶刀共其身一代

御免被仰付候

一、源兵衛外老、藤左衛門外七人之者共儀は、右三郎右衛門并

同人親勘解由、寄特之取計有之候旨申立候段、神妙之儀ニ付

御褒被置候

右之通被仰渡、冥加至極、難有奉畏候、仍て御請証文

差上申所如件

津田山城守知行

下総国香取郡

佐原村

百姓

三郎右衛門

寛政十三酉年正月二九日

右同人親

当時隠居

勘解由

御箱訴人

同人知行

同国同郡

同村百姓

源兵衛

与左衛門

藤左衛門

幸右衛門

傳右衛門

四郎兵衛

清左衛門

甚右衛門

右八人惣代百姓

藤左衛門

同

源兵衛

滝川小右衛門御代官所

同国同郡

加藤洲村

百姓

仁兵衛

小笠原安房守知行

同国同郡

津之宮村

百姓

清兵衛

右式人代

同村

名主

藤之丞

御奉行所

前書被仰渡之趣、私共儀も一同罷出、承知仕候、依之
奥書印形、差上申候、以上

右差添人

佐原村

名主

仁左衛門

津之宮村

組頭

次兵衛

『津田山城守の知行地である下総国香取郡佐原村の百姓源兵衛ほか一人は一昨年十二月、同村藤左衛門ほか七人は昨年正月に、三郎右衛門（景敬）とその親、勘解由（忠敬）が先祖からの申し送りを守り、村政に力を入れて参りましたことを、二度にわたりお箱訴致しましたところ、右の者たちをお呼び出し、お調べがありました。また、三郎右衛門もお調べになり、次のようなお知らせがありました。』

一、三郎右衛門の先祖は天正年間に佐原村にまいり、住みついております。それ以来、代々村のためになることを心掛け、引き続き勘解由もこの申し送りを守り、村中の困窮人などをあわれみ、類焼にあった

ものへ米、錢、食べ物などを与え、凶作の年又は洪水などのときは、村内は勿論、近郷までも食料を貸したり与えたりしました。また、貧窮のため年貢が納められない者には肩代わりしてやり、米や穀物がなくなり値上がりしたときも、窮民救済に心を配り、すべていつも村内を大切にして参りました。三郎右衛門も幼年から孝行で、父の教えに従い、代々の申し送りを守り、公儀を重んじ地頭所を大切にいたし、いつも人をいたわり、村内の貧窮で年貢が納められない者に肩代わりしてやり、または貧家の長病人産婦などへ気を遣い、類焼の者を労り、且つ困窮で潰れそうな者、または荒れ地起し返しなどの手当として積み金を心掛けたり致しました。このように、先祖より数代の申し送りを守り、すべて村の為になるように、いつも取り計らって参りました奇特な志にたいし、ご褒美として三郎右衛門に銀十枚下され、苗字は子孫まで名乗り、帯刀は一代御免を仰せつけられました。勘解由は銀十枚をいただき、苗字帯刀とも一代御免を仰せつけられました。源兵衛ほか一人、藤左衛門ほか七人の者たちは、右の三郎右衛門と同人の親勘解由が、並々ならぬ善行を重ねて参りました事を、お上に申し上げた事は殊勝であると、お褒めにあづかりました。右の通り仰せられ、この上なく有り難いことでございます。このように、お請け証文をさしあげます。

御奉行所

箱訴人名略

このような仰せを頂いた事を、私たちも承知いたしましたので、奥書、印形を差し上げます。

差添人名略』

その二

乍恐書付を以御訴奉申上候

一、津田山城守知行、下総国香取郡佐原村百姓三郎右衛門、申上候私并親勘解由儀、先祖より寄特致来候趣、御箱訴仕候もの有之追々御吟味之上、今般被差出、三郎右衛門儀、子孫迄、苗字相名乗、其身一代帯刀御免、勘解由儀ハ、其身一代、苗字帯刀御免被仰付、剩、兩人共御銀頂戴仕、誠に冥加至極、可申上も無之、御仁恵之程奉恐入、子孫迄も忘却不仕、難有仕合奉存候然ル所、私共苗字之儀ハ、伊能と相名乗申候間、此段御訴奉申上候以上

津田山城守知行下総国香取郡佐原村

勘解由代兼百姓

寛政十三年酉年正月晦日

三郎右衛門

御奉行所様

『津田山城守知行下総国香取郡佐原村百姓、三郎右衛門から申し上げます。私と親の勘解由が先祖より奇特であるとお箱訴を致した者がありお調べの上、この度、三郎右衛門は子孫まで苗字を名乗り、一代帯刀をお許し、勘解由は一代苗字帯刀をお許し頂きました。その上兩人ともご褒美をいただきました。たいへん有り難い事で、子孫まで忘れる事なく感謝申し上げます。このような次第でございますから、私共の苗字は伊能と致したいと存じますので、この事をお知らせ申し上げます。』

また、関係資料に次のようなものがある。

「吉事御見舞目出度申納帳」

寛政十三年二月吉日

「伊能家公儀ヨリ御褒美被下候ニ付為祝儀金六拾五両受取証文」

享和元年七月

「伊能忠敬父子に付村民箱訴所用金子受取百姓代連印証文」

享和元年西七月

箱訴に関する費用などを、三郎右衛門（景敬）が負担したことは、明らかであり、箱訴事件には様々な人達が、関わっていたであろう。間 重富から高橋至時への書簡には、次のように書かれている。

（星学手簡―享和期における麻田流天文学家の活動をめぐって―より）

勘解由事、兼て村方之義とも取ゞり憐憫を加へ申候段、箱訴人有之上え御聞に達し、此度御銀、帯刀御免、自分のミに非、倅三郎右衛門迄御称美、此度同様に被仰付、天下無憚帯刀人に相成候段、誠に以難有御事、本人も殊之外難有奉存候よし書中にあらわれ、私義も承り人々え風聴致候、皆々驚キ申候、扨々羨敷御事に御座候、此度蝦夷之一件も御称美も可有之、此レも日本に神武此の方一人にて、ケ様成人出候も 上之御徳と奉存候、何卒々々此の上蝦夷も北西の所迄 全国の図出来候ハハ世の宝とも可申候、

間 重富さんは、忠敬を大に見直し羨やんでいる。彼は、忠敬の師であり指導者であったが、大阪の町人という立場では、組織的に村民を動かす事など、考えられなかったであろう。非常に素直な人であったようである。

こうして、苗次帯刀を許された忠敬は、晴れて幕府の御用旗をかかげ、全国を歩きだした。しかし、忠敬が腰に差したのは、測量の計器が狂わないようにと、「竹光」であったという。

地域史料

徳山藩御用絵師朝倉湖内（南陵）のこと

伊藤 栄子

徳山毛利家文書、御用意日記のあらまし

平成八年秋、本会の渡辺一郎氏が、山口市の山口県立文書館へ行かれ、同館所蔵の徳山毛利家文書の内から、伊能測量隊に関する御用留「文化三丙寅測量方巡廻ニ付御用意日記」を、写真撮影して持ち帰られた。伊能測量隊が徳山地方に入って測量したのは、文化三年四月廿日から廿五日までと、あと日本海側にある飛地の二カ村であった。この御用意日記は前年の十月頃の老中先触にはじまって、徳山藩の役人が調べた伊能隊の山陽道通行の様子、滞在地、メンバーの構成や、身分についての細かい報告が書かれており、面白いものである。

藩としては測量隊到着の半年も前から、準備をすすめていた。記録の主な内容は

- * 先触、老中触、測量に関係した人々のこと
 - * 動員された船、漁船、人夫、村の漁夫等の数
 - * 測量隊の宿泊の準備、部屋割、測量用具
 - * 食事、夜具、寝具、風呂、その他食器等の諸道具類の明細
 - * 寺社明細、村明細等
 - * 借上諸道具への褒賞、協力者への謝礼金
- であり、最後は協力者への褒賞でしめくくられている。

書留の終りが文化三年十二月であるから、この記録は徳山藩の準備の段階から、測量隊関係すべての始末がおわるまで、約一年有余にわた

ったものである。これを渡辺氏がアルバム九冊にまとめられた。写真の数にして四百十八枚で、一枚のネガは、見開きで二ページとして、凡そ八百ページ余の本に相当する。この様に事こまかにまとめた文書は、伊能隊の測量資料として、大変貴重なものといえよう。まことに興味深いものである。徳山毛利家文書の詳細については、いずれ機会をみて紹介したいと思っている。

朝倉湖内（南陵）のこと

この御用意日記を読んでいて、測量に協力した人々の中に、徳山藩御抱えの絵師朝倉湖内という名前が目についた。私がかつて地方史の本で知った人物である。そこで今回は朝倉湖内について紹介する。

本文のまえに徳山藩毛利家と萩の毛利家との関係についてふれてみよう。元和元年（一六一五）萩の毛利輝元は、次男就隆に都農郡の地（三万石）を分知した。のち慶安三年に下松より野上に、居を移して徳山と改め、徳山藩は萩藩の支藩として成立した。それ以来徳山藩は本藩との関りを持ちながら、一度の改易はあったものの、天保年間に一万石を加増、柳間詰・四万石の藩として明治維新まで続いてきた。

この徳山藩代々の御用絵師をつとめて来たのが朝倉家で、三代友明は三人扶持、茶道格、御絵師として召抱えられていたが、若くして亡くなったので、親族から四代目として迎えられたのが湖内で、十二才で家督をついでいる。宝暦六年生れというから、忠敬先生より十一才若いことになる。

安永元年（一七七二）湖内十七才の時、初めて萩の雲谷家へ赴いて、雲谷等徴・等愷父子に師事して湖内は等主と号した。萩の雲谷軒（庵）とは、大内政弘があつた有名な画僧雪舟に与えたアトリエ兼住居であつ

た。その後大内氏は陶晴賢によって亡ぼされたが、毛利氏は元就以来代々大内文化を大切に伝えてきた。

文禄二年(一五九三)毛利元就の孫の輝元が、家宝としていた雪舟の山水長巻と、その住居を毛利家御用絵師に与えた。この拝領によって、彼は雪舟の画系を継ぐ絵師として公認され、それ以後雲谷を姓とし雪舟等楊の等をとって、雲谷等顔と改めた。このような由緒ある雲谷家において湖内は修行し、萩に滞在中は一人扶持を与えられている。また天明五年と六年には、二度にわたって江戸に出て、漢画を学んだこともある。

寛政三年(一七九一)藩から領内大絵図を画くことを命ぜられ、続いて御本家様(萩の毛利家)その外御末家様御験一冊、筑前相福寺への画等仰付けられ差出した。これに対して、御蔵本から銀三両を与えられている。この御褒美は領内地図作りへの労いだったようである。

地図作りとはこの様に、大変な仕事であった。翌四年御領絵図認方を仰せ付けられ、萩へ出向き絵図御内用として専念する。この時代既に萩の本藩では絵図方役所があって、湖内は萩絵図方の有馬詠次(雲谷派絵師の一人、喜惣太の孫)方に身を寄せている。当時藩内の絵図取りの仕事は、内密に進めるようにとの事で、雲谷等先生に相談の上起請文(偽りや違背をしたら、神仏の罰をうけても差支えないという誓約文)まで書いて仕事についている。

このうち萩本藩から帰った湖内は、享和元年(一八〇一)六月からは藩命によって、徳山藩内の村ごとの絵図作成にとりかかった。萩の有馬喜惣太の作った絵図、行程記を写したことは、領内絵図作成の準備だったのである。のちに萩にきた伊能忠敬は喜惣太のつくった絵図を見て、さすがの忠敬も感嘆したといわれている。(喜惣太は「一村限明細図」「地下上申附図」等を作成した。萩藩ではその功により宝

暦十二年士籍に列し、特に「地理図師」という役職を設け、代々有馬家の世襲とした)

地図師湖内

文化二年(一八〇五)に湖内は領内の島々全部の図取りの外、御屋敷山東西南北見渡図を仰付けられ地図作成に没頭する。こうなっている絵師というより、地図師としての毎日であった。

翌三年四月の伊能測量隊到着に先だって、三月二日湖内は、御絵図その外御用懸を仰せ付けられた。藩からは各村の庄屋へ、絵図方に対して協力を依頼する触書が出されている。文化三年三月四日から、藩としての領内測量が始まった。湖内は雨天の日以外は毎日のように領内の村々、島々の図取りや下調べに追われた。伊能測量隊のくる一月以上も前のことである。測量隊を迎える藩の準備は大変であった。

徳山藩領には瀬戸内海に数多くの島々がある。これらの島々も入念な図取りをしていた。記録によれば、三月四日東豊井村から測量が開始され、地元の庄屋宅に泊りながらの毎日、雨の日は下図を書き、帰宅もままならなかった。栗屋、徳山、福川、富海等湾沿岸の村々を廻り、図面の確認をしていた。

四月九日になって測量御用の御達内容の変更を、御蔵本から言ってきた。かねて図面は一丁一寸の割で認めるよう、仰せ付けられていたが、芸州で一丁六分の割で認め差し出した所、伊能隊が気に入ったので、六分の割に変更となった。そこで俄に新規の図面に書きかえることになった。

また島々のことは、これまでの図で済ますつもりであったが、上之関にての聞合せによると、島々廻り岩組等随分念を入れよとのことで、

急に島々を廻ることになった。

四月廿日測量御役人のうちの一手が到着し測量がはじまった。忠敬の測量についての注文はまことに厳しいもので、「港を入れよ」「はぜ植林と地名も」と次々に通達がくる有様に、藩内は大さわぎであったという。また浜田藩などでは、村絵図を何度作り直しても気に入られず、藩士・庄屋達はクタクタになるし、毎日人夫は六十人も動員されたと、その様子を統新周南風土記は伝えている。

また徳山藩には日本海側に二カ村の飛地がある。御当地の測量も終りにちかい四月廿五日に、湖内はこの奈古・大井の両村へ行き図面を認めるよう仰せ付けられている。徳山毛利家文書によれば、

朝倉湖内

右五月三日徳山出立、六月三日迄日数廿九日奈古滞留中日別御賄代錢九十六文宛として、御付人あらしこ（力仕事をする人夫）一人とあり約一カ月かの地に留まっていたことが分る。測量途中、忠敬先生の病気などもあって、少々日数がのびたのであった。六月五日萩から帰った湖内は、藩主より特に上下を拝領した。

文化五年（一八〇八）湖内は五十三才になったのを期に惣髪し、号を南陵と改めることを願ひ出て許される。文化九年徳山藩に絵図方役所が新設され、南陵は絵師兼務でその職につくことになった。絵図方役所の設置は、萩の本藩よりは数十年後であるが、毛利支藩の中では徳山藩のみという。（支藩とは他に、長府・清米・岩国の各藩のこと）文化十年三月、南陵は「御座船図」と「大坂より赤間の海上図」を画いた。このころ漸く測量方の御用も一段落し、久しぶりに大成寺御書院の襖両面に絵を仰せ付けられた。少しずつ御用向の絵にとりかゝるようになった。

文政二年、郁姫様（八代宏鎮長女）の京極備後守様へ御輿入につき、

御祝に六幅の絵を仰せ付けられ、子の牧太（震陵）と共に御婚禮の為の絵を作成した。その後南陵は、御殿二の間の金屏風絵や、萩御役・江戸方御当役より御留守居までの十人の画等々を、父子で仰せ付けられ絵師本来の業に没頭した。

伊能忠敬は、文化三年・六年・八年・十年と防長地方にきている。

南陵はいく度か忠敬に接してきたわけで、しかも忠敬の測量技術には驚嘆したらしく、文政四年（一八二二）子の震陵を江戸の伊能家へ行かせ、都濃郡図の写し取りを命じている。文政八年南陵は絵図方を務めた功により、一代中小姓から永代中小姓へと重用されたという。

天保二年二月、七十六才の南陵は体力の限界もあり、絵図方「地図方」の御用向を御辞退申上げて許される。この年、家督を子の震陵に譲ったが隠居の後も御用画の製作につくした。天保十三年八十八才で卒す。

参考文献

統周南風土記、小川宣著

近世防長人名辞典、マツノ書店

徳山毛利家文書の内、文化三丙寅測量方御用意日記

毛利家の御用絵師雲谷等顔とその一門、安村敏信（板橋区立美術

館学芸主査）

三百藩家臣人名事典、国会図書館蔵

お知らせ 2

特別寄稿 例会から新語流行のきざし?

堀田 希一

新語が披露された。「忠敬(ちゅうけい)ともだち」である。

何となく茶飲み友達を連想するが、伊能図を研究したり、忠敬の業績を調べたり、その道筋を歩く人をまとめてこう呼ぶそう。

日本歩け歩け協会・忠敬の道委員長の佐藤嘉尚さんが発明した新語を披露したのは国土地理院の野々村院長。佐藤さん執筆のエッセーが初出だということだった。収まりやすい表現に、参加者全員が感心。

帰りのバス中に早くも流行のきざしが見えた。

流行が楽しみな新語の飛び出した秋の例会貸し切りバスツアーは、十月二十五日午前八時五十五分にJR東京駅日本橋口を出発。

車内では、渡辺一郎事務局長が張り切った。全員に発言を強要、眠そうな会員を奮いたたせた。軽妙なあいさつに笑ってばかりの一時間がすぎ、茨城県伊奈町の中央図書館に到着。間宮林蔵研究家・大谷恒彦さんの講演を聞き、間宮林蔵記念館と復元生家を見学した。

記念館の展示品はなかなかの迫力だったが、復元家屋は江戸時代後期の家屋の特徴を無視した作りだったので、ちょっとがっかり。案内板の復元前住居図も奇妙だった。間宮林蔵顕彰碑と林蔵のお墓では、河島悦子さんが墓石の風化状態に首を傾げていた。

驚いたのは、歩く先々の看板や表札が「間宮」だったこと。「多いねえ」が全員の感想だった。ひょっとしたら間宮家は、江戸時代から続く富豪の一族だったのかも知れない。町立記念館や復元生家は、一族がスパイ容疑をかけられた祖先の名誉回復につとめた結果、と見れ

ばわかりやすい……。そんな感想を抱かせるほど、間宮という姓の目立つ土地だった。

伊奈町を出て、遅めの昼食休憩。弁当を買い込んで近くの公園などで食べる姿から、伊能忠敬研究会の会員が野外活動に慣れていることがわかった。これならば、二年がかりの四千万歩・一筆書きでも「測量方御用」の旗がはためき続きそうである。

午後、つくば市の国土地理院を訪問。野々村邦夫院長ら幹部職員が玄関までお出迎えくださった。この時の院長のあいさつで、佐藤さん製造の新語「忠敬ともだち」が披露された。その後二手に分かれ、目的だった江戸府内図を見せていただく。南北に分かれたきれいな原図に、感激する。

その余韻か、新潟から参加した垣見壮一さんは自由行動中に、地理院の売店で〇万円もする「伊能中図」の模写セットを買ってしまった。そう聞いて驚いていたら、もうお一方も購入したと後で聞いた。世界の地図好きが訪れる同売店でも、これまで八セットしか売れていなかったという高価な品が一気に二セットも売れたせいで、係員はニコニコ。「伊能忠敬を研究する人たちは、やはり違う」と、途中から熱心に相談に応じていたのが面白かった。

帰路は、渡辺事務局長の発案で車中反省会。佐藤さんが新語の生まれるまでの経緯を説明した。楽しい話に一同大笑い。最年少の新沢義博さんから「次回は忠敬の生家があった九十九里浜にしてはどうか」と提案があったが、「じゃ幹事をお願い」という渡辺事務局長のすかさずの依頼にまた爆笑。笑い疲れた旅は、有楽町の二次会で終わった。

(ほった きいち・朝日新聞社)

朝日新聞記者の堀田さんは「忠敬ともだち」の一人として例会に参加されました。(編集部)

伊能忠敬の足跡に迫る

佐久間達夫

中に事細かに記した金五十冊にものほる日記と、これを整理・清書した湖暈日記二十八冊が残されている。これは寛政から文化にかけての諸国の地方文化を知ることでできる貴重な資料である。

日記は寛政十二年（一八〇〇年）から文化十三年（一

[illegible]

陣、脇本陣の名と家の造り、それに諸藩からの贈答品や

測量日記の本文の
一部



としの一環として市町村史の作成が盛んになって測量

伊能敬氏は武蔵大学で理

る。地名や人名は、古文書
辞典や二十万分の一地図を

初、緯度の長さを求めるものだった。それが最終的に

仕事に自信と誇りを持って
いたように考えられる。

(さくま・たつお)元伊能忠敬記念館館長

享月 日 葉斤 辰

1997年(平成9年)10月26日 日曜日

十月二十六日の朝日新聞(朝刊)第一面には、伊能大図写本の発見記事が掲載されました。

伊能忠敬の大図写本43枚発見



気象庁の図書館で

原本すべて焼失 全体像知る資料

日本の近代的実測図の先駆けとなった伊能忠敬(一七四五―一八一八年)による「大日本沿海輿地(よち)全図」のうち大図(たいうず)四十三枚の写本が気象庁内の図書館(国立国会図書館支部)でみつかり、このほど国会図書館に寄贈された。伊能没後の一八二一年(文政四年)、江戸幕

府に上呈された「伊能図」の完成版を原寸大に模写したものの、二百十四枚にのぼる実物はすべて焼失しており、大図の原寸大の写本もこれまでに十数枚しか発見されていないという。国会図書館は「伊能図の集大成を現代に伝える第一級の資料」としている。

みつかったのは、日本全体を二百十四枚に分けて記載した大図のうち、関東を中心にした東日本分の一部。一辺が約百二十キロ、もう一辺は七十一・二百キロ程度。大図は三万六千分の一の縮尺で、海岸の状況や村落、社寺、領主名などが細かく記載されている。

実物は二部作られ、正本は幕府に提出され、副本は当初伊能家に保管された。

だが、いずれも皇居火災や関東大震災で焼失。国会図書館によると、今回の写本は、明治初期に伊能家から政府に納められた副本から模写されたとみられる。

伊能図研究の第一人者で「伊能忠敬研究会」代表、渡辺一郎氏は「大図の全体像を知る上でも貴重な資料だ」と話している。

◆連載 第六次測量日記 (六)

佐久間 達夫

宇和嶋城下より佐田岬まで
文化五年閏六七月

同二十日 朝晴。六ツ頃三浦 大内浦出立。手分。白組我等、下河辺、青木、稻生、佐助、同浦竹ヶ崎より初、三浦の尾崎浦、深浦、弓立浦を歴て結出浦字カチンボ迄測、赤組へ合測。赤組坂部、柴山、文助、善八、九嶋の内小池浦字鳥ノ首より初、同平浦、同敷浦、同船隠船を測、それより三浦の内夏秋浦、結出浦字カチンボにて白組と合測、共に八ッ後九嶋の内小浜浦へ着。止宿 本陣 材木屋善藏、別宿組頭八郎兵衛。此夜晴天測。九嶋浦、九ヶ所、敷浦、平浦、小池浦、小浜浦、石心浦、白浜浦、坂下津浦、合地方七ヶ所、本浦(旧名百浦)、本九嶋(浦嶋二ヶ所)、合九ヶ所。

同二十一日 朝晴曇。六ツ前、九嶋属小浜浦出立。手分。白組我等、下河辺、柴山、稻生、佐助、再手分をなし、柴山、稻生、佐助、九嶋持の小高嶋を測、それより九島字喧嘩鼻より右山に添、字ウドガ崎にて再手分と合測。我等、下河辺、庄作、藤吉、九嶋喧嘩崎より相分れ左山に添、本九嶋浦、又本浦(旧百浦)を歴てウドガ崎にて再手分と合測し、又一手に成、乗船、地方坂下津浦字馬越、又鳥井松より初、逆に坂下津浦(同枝)、大福浦(家四五軒)を経て赤組と白浜浦地内にて合測。坂部、柴山、文助、善八、小池浦の内

字鳥ヶ首より初、小池浦、小浜浦、石心浦、白浜浦、を歴て同浦地内にて白組へ合測、外に琵琶ヶ嶋一周を測る。共に乗船して直に宇和嶋城下へ七ツ前着。本陣 味噌屋庄三郎、協亭主藤屋助右衛門、藤屋貞治郎。別宿米沢屋六右衛門、協亭主米沢屋幸六、中屋安太郎。善後吉田領部方中目役増田惣右衛門来る。此夜中晴測。

同二十二日 朝より晴天。同所逗留。地図盤を仕立て。郡方下役都築九右衛門、横田儀兵衛、森丈右衛門、小川五郎兵衛次上下にて出る。下目付寺田由兵衛出る。以後案内のよし。町方大年寄長山久助領主より使者に来る。我等へ嶋縮二反、鰯^{イサナ}三十枚、坂部、柴山、下河辺、青木へ嶋縮一反、十枚宛、秀藏へ嶋縮一反。文助、佐右衛門、庄作へ金白足宛、佐助、善八へ綾布意反宛、藤吉並下役中廣へ銀幣兩宛御贈物、即 帰府同迄預け置。此夜亦測。

同二十三日 朝曇晴。六ツ半頃坂部、柴山、下河辺、皆木、文助、佐助、宇和嶋城下本町二丁目測所より初、猪磨口ノ門に至り、それより大手前を通り、中ノ町(待屋敷)、佐田町、松崎新出、毛山町南組、来利、同町の内宮下村を越て九嶋浦、坂下津浦字午越迄測。白組一昨日の初に合測。それより乗船須賀浦の内字川崎より初、同浦の内島堤新出、須賀本浦を測。それより宇和嶋城下横新町、堅新町、袋町一丁目二丁目、茶屋横町

を経て本町二丁目測所に至て合測。午前には帰宿。此日同国大洲郡方手付菊池久兵衛、同所用達長岡兵衛、同給図方東寛治、同御庄屋浅見伊左衛門采向。宇和嶋領立四所庄屋仲原四郎出る。和置新社へ参詣。同二十四日 晴曇。此日当城下出立の所、郡方下役中一同堀に付、地図を成。此夜小雨。

二十四日 磯外。当町大年寄島月越十郎使として勘解由へ杉原五束、鰯三十枚、坂部、柴山、下河辺、青木へ杉原三束、鰯二十枚ずつ。秀藏へ杉原二束。佐右衛門へ同二束宛。庄作、佐助、善八、白銀三向宛。藤吉、下役人中、嘆四人へ白銀老向宛、贈物被下。帰府同迄預け置。

同二十五日 朝大曇。微雨見合四ツ頃宇和嶋城下出立。手分、後手白組我等、下河辺、青木、稻生、佐助、下村枝須賀浦河崎鼻より初、大浦、及、同浦枝赤松を過、大浦の内字モジロ迄測、先手赤組坂部、柴山、文助、善八、字モジロより初、高串村枝知永浦を測。それより吉田領立間尻浦、君ヶ浦を歴て吉田川口迄測、印杭をなし同所本町一丁目迄測止宿吉田本町二丁目法華津屋久右衛門。別宿油屋善三郎、善後も郡代中見役鈴木作兵衛、兵藤友右衛門、浅見猪左衛門、増田宗右衛門、道方小野川権左衛門、郷目付白井久助、芝喜三右衛門等出る。宇和嶋郡方下役都築九右衛門、横田儀兵衛、森丈右衛門、小川五郎兵衛、郷目付二宮長太夫、今田善右衛門等出る。清家平十郎、下村庄屋林左衛門、大津庄屋伴藏送来る。吉田領付添庄屋赤松佐左衛門、立間村、西村善治郎、二及沼庄屋笹田仁左衛門、河内村庄屋山下源治郎、安土浦庄屋安之丞、源浦庄屋仲吾案内。此夜晴天測。

同二十六日 晴天。同所逗留。地図を成。午後より我等病氣。

同二十七日 朝晴天。六ツ前後吉田出立。手分。白組下河辺、稻生、柴山、佐助、南君浦持野嶋半周を測。又、奥浦の内大良鼻より左山に添、大良浦を過、同浦字間口迄測、赤組坂部、青木、文助、善八、吉田川口より初、立間尻浦属鶴間浦、鶴間浦の内管ヶ浜、浅川浦(旧は一浦也。今は立間尻浦に属)、牛川浦(南君浦支配)、立目浦(同上)、恵美須浦(同上)、南君本浦を歴て宇和嶋領奥浦の内中浦迄測。止宿 本陣 中浦庄屋五郎太夫。別宿組頭長三郎。白浦庄屋赤松佐左衛門、立間尻浦庄屋仲源四郎、南君浦庄屋五右衛門案内、明日止宿法華津浦庄屋祐左衛門来る。此夜中晴測。我等病氣。

同二十八日 朝小曇。六ツ半頃奥浦の中浦出立。手分。白組下河辺、稻生、庄作、善八、中浦止宿下より初、奥浦の内小浦、古浦、船間浦を歴て字間口迄測、昨日測と合す。それより小入海を渡り向地間口より逆測、昨日同組測初の大良鼻に至て合測。又引返し間口より順に宇和嶋領奥浦、吉田領白浦の海界迄測。九ツ後に法華津浦着。赤組坂部、青木、文助、善八、宇和嶋領奥浦字立岩より初、吉田領白浦枝筋浦、花組浦、白浦字三尾浦(家七軒)、字畔谷浦(家五軒)を過、白浦本浦に至て中食(即 庄屋赤松佐左衛門)。それより法華津浦枝与村井浦を歴て法華津本浦迄測。九ツ半後に着。止宿一同法華津浦庄屋祐左衛門。前

宿奥浦庄屋五郎太夫来る。付添庄屋下村の林左衛門、高山浦善治、清家平十郎、上波浦俊治案内。明日止宿狩浜浦庄屋助左衛門、渡江浦庄屋弥平治、後津浦庄屋新三郎出る。此日阿州樋富菊郎より飛脚にて書状届、即 坂部より返書遣す。午後より大曇天。夜に成北風大雨。

同二十九日 朝大風雨。四ツ前に至る。逗留。其後も小雨。我等病氣。

同晦日 朝曇。四ツ頃より晴天。五ツ前法華津浦出立。一手測、下河辺、青木、稻生、善八、法華津浦より初(同浦)、宮浦(同)、小深浦、それより深浦(本浦 当時庄屋なし)、深浦枝池浦(庄屋居、後津浦(庄屋浦)、渡江浦(同上)、狩浜浦字網代浦字康脇浦を過、狩浜本浦へ八ツ頃着。本陣 庄屋助左衛門、別宿津家宗徳寿山広福寺、宇和嶋領高山浦庄屋田中九郎治来る。我等病氣。

七月朔日 朝曇。六ツ半頃狩浜浦出立。手分。赤組坂部、柴山、文助、善八、吉田領狩浜浦止宿下より初、吉田領同浦、宇和嶋領高山浦界字高浦迄測、白組下河辺、青木、稻生、佐助、宇和嶋領高山浦字高浦より初、高山本浦同枝宮浦、岩井を歴て、高山浦枝田之浜浦迄測。八ツ頃着。赤組は四ツ頃に着。(我等は病氣、狩浜浦乗船直に当浦止宿へ来る。五ツ半後急雨あり。急雨前に着。止宿田之浜浦組頭与治兵衛。不殘同宿。着後狩浜浦庄屋助左衛門、明日止宿吉田領皆江浦庄屋源右衛門来る。宇和嶋郡代下役四人も出る。(宇和嶋

領、吉田領共領村日々付添、着後に出る。不記多し)吉田大船頭矢野関太夫も出る。加室浦庄屋良右衛門仲満之丞出る。此夜曇天。三四星測。

同二日 朝中晴。六ツ半前田之浜浦出立。手分。

後手白組下河辺、青木、稻生、佐助、田之浜浦止宿下より初、加室浦枝下泊浦(当時庄屋居る浦なり)、加室本浦、それより同浦枝神子浦を歴て字カレイ崎迄測、八ツ頃皆江浦着。先手赤組坂部、柴山、文助、善八、加室浦枝高嶋一周測(小高嶋、水作嶋遠測)。それより宇和嶋領加室浦、吉田領皆江浦界、カレイ崎より初、皆江浦の内カレイ浦(人家七軒)歴て皆江浦迄測、四ツ頃に着。(我等病氣、直に当浦へ至る)皆江浦本陣 庄屋源右衛門、別宿補陀山濟家見光寺。宇和嶋城下組付添案内 清家平十郎、戸嶋浦庄右衛門、來村太郎左衛門、下村林左衛門、上波浦俊治、高山浦善治、毛山村孫三郎、大浦善代松是迄案内して、此浦より各村へ帰る。是より宇和嶋領付添案内、野田太左衛門、都築庄蔵、川野石浦六郎兵衛、大平村安左衛門、野田村隼太出る。此夜晴天測量。同三日 晴天。朝六ツ半前 皆江浦出立。手分。後手白組下河辺、青木、稻生、佐助、皆江浦止宿下より初、蔵賀浦、有太刀浦(安土浦支配)、有網代浦、安土浦、津布里村(此一村斗 宇和嶋領)、朝立浦、垣生浦を過、垣生浦、二及浦境に至て先手の初へ合測。先手赤組坂部、柴山、文助、善八、垣生浦、二及浦境より初、二及本浦、河浦の内 長波石浦、それより岡木浦

の持ビリ嶋半周を測、又 長波石浦より周木浦を歴て、吉田領周木浦、宇和嶋領穴井浦境字立ガミ迄測、兩組共八ッ後周木浦へ着。(我等は病氣、直に当浦へ来る)止宿 本陣 庄屋民右衛門。別宿済家宗大龍山光勝寺。吉田浦庄屋矢野市郎兵衛病氣に付仲弥治郎出る。(大島浦は、穴井浦属なり。当時穴井浦に庄屋無之に付穴井浦、大嶋浦共に舌間浦より兼帯。此夜晴て測量。

同四日 朝より晴天。六ッ前周木浦出立。乗船、宇和嶋領穴井浦の属大嶋へ渡、手分白組柴山、文助、佐助、赤組下河辺、青木、善八、大嶋の内地ノ大嶋字小嶋道越より左右へ分測。(小嶋は迄測)、山王嶋(白組にて半周測、それより沖大嶋(人家あり。一浦なり)を両手にて合測。栗嶋(白組にて半周を測)、九ッ前に大嶋止宿着。本陣 源治郎。別宿長八。此夜晴天測。吉田領上泊浦庄屋丹藏、周木浦庄屋民右衛門、川名津浦庄屋与左衛門出る。宇和嶋郡代下役吉田郡代中見役出る。浅草層局より用状午後宇和嶋より相届。

同五日 朝より晴天。六ッ前大嶋浦出立。乗船手分。下河辺、青木、稻生、佐助、白組後手にて穴井浦字タテガミより初、穴井浦、それより馬目網代浦の内小網代浦、馬目網代浦字楠浦(人家なし。字斗迄測。先手赤組坂部、柴山、文助、佐助、馬目網代の内字楠浦より初、吉田領上泊浦の内字大ケ毛(家二軒)、同浦字古泊浦(家一二軒)、上泊浦、川名津浦を歴て上泊浦枝白石浦至る。即、吉田領上泊浦、宇

和嶋領合田浦境迄測る。兩組共午前川名津浦止宿着。本陣 庄屋与左衛門。別宿済家宗玉泉山曉範寺。舌間浦庄屋矢野市郎兵衛、仲弥治郎。明日止宿宇和嶋領八幡浜浦庄屋浅井万兵衛、吉田領上泊浦庄屋丹藏出る。合田浦庄屋治右衛門病氣に付、馬目網代浦庄屋仁兵衛名代相動よし断あり。是迄吉田領本陣詰用聞務田村庄屋良右衛門、成家村庄屋理兵衛、別宿用聞成藤村庄屋孝之丞、川内村庄屋義兵衛、吉田領當時止宿相済に付暇乞に出る。此夜晴天測。

同六日 朝より晴天。六ッ頃川名津浦出立。手分。赤組坂部、柴山、文助、善八、八幡浜持左嶋一周を測。それより同所字網引越より初、栗之浦を歴て八幡浜浦迄測、九ッ頃に着。白組下河辺、青木、稻生、佐助、上泊浦、合田浦境より初、合田浦、舌間浦、栗野浦字網引越迄測、赤組へ合測。九ッ半頃に八幡浜浦へ着。止宿庄屋浅井万兵衛(大家なり。家作も宣、造酒網も二張するよし)。当浦支配向瀬浦、栗野浦、北茅村、南茅村、松尾村、合三浦三村なり。昨夜泊の川名津浦庄屋与左衛門来る。吉田領付添白浦庄屋赤松佐左衛門、立間村庄屋西村善治郎、二及浦庄屋笹田仁右衛門、深浦庄屋 庄吾、吉田領測量先は相済に付、当所宅代官片山市左衛門見舞に出る。去る二日より入替の宇和嶋領付添案内役人五人共出る。

同七日 同所逗留。晴天。午中迄地図を成。午後より休、郡方下役四人麻上下にて祝儀に出る。郷目付も出る。同国西条領大町村庄屋龜右衛門、同断中

野村庄屋新兵衛様子見に来る。(当国にては見聞に来るという)。

同八日 朝より晴天。六ッ後八幡浜浦出立。手分。先手赤組坂部、柴山、文助、善八、伊方浦、川之石浦枝南井浦(同断)、内ノ浦(同断)、赤網代浦を歴て川之石浦止宿下迄測、後手白組へ合測。後手白組我等、下河辺、青木、稻生、佐助、八幡浜浦より順に向瀬浦(川之石浦枝)楠浜浦を歴て(同断)、網ヶ浦(川口渡より右にて川之石本浦に家統ゆえ、測量野長に落、即 川之石浦より人家統同前北にあたる)、川之石浦測所にて合測、四ッ頃着。川之石浦本陣庄屋六郎兵衛、別宿組頭忠四郎。着後昨夜止宿八幡浜浦浅井万兵衛、明日止宿伊方浦庄屋辻庄右衛門来る。当所住居の保内組代官竹場六兵衛出る。伊方浦十一ヶ所、大浜浦、中之浜浦、仁田浜浦、河内浦(海辺人家不見。仍て測量野長になし)、佐瀬部浦、小中浦、中浦、川永田浦(庄屋住居)、宿名浦、茅浦(山越北東)、伊方越浦(同上)也。此夜晴天測。

同九日 朝より晴天。セツ半頃 川之石浦出立。手分。白組後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、川之石浦、伊方浦境より初、伊方大浜浦、同中之浜浦、仁田之浜浦、河内浦(海辺の奥にあり。人家も不見)、佐瀬部浦、小中浦を歴て中浦人家下迄測(それより伊方越浦へ横切峠迄測)、赤組先手坂部、柴山、文助、善八、川永田浦持瀬嶋一周を測、それより地方へ渡、川永田浦字室ヶ崎より初、逆に川永田浦(即 庄屋本浦)

を歴て同浦枝中浦人家下迄測て白組合測。それより白組横切の味へ行、白組と共に内海外海、山嶋を測九ッ頃、伊方川永田浦へ着。本陣 庄屋辻庄右衛門、別宿安左衛門 明日止宿九町浦庄屋伝左衛門来る。

同日 朝曇。七ッ半後伊方浦川永田浦出立。手分。先手赤組坂部、柴山、文助、善八、三机浦枝塩成浦字クラガリより初、逆に二見浦枝加周浦、二見本浦を歴て九町浦に至り、それより九町浦の内字オリツキにて白組と合測。後手白組我等、下河辺、青木、稻生、佐助、川永田浦字室崎より初、順に伊方浦枝宿名浦を歴て九町浦字オリツキにて赤組へ合測共九ッ頃九町浦へ着。止宿 本陣 庄屋伝左衛門、別宿同人隠宅着後、三机浦庄屋菊池宇右衛門、三崎浦庄屋小倉部蔵来る。此日度々雨。

同日 朝曇波浪高 大風雨。難斗。郡代下役一同申差留に付逗留。地図をなす。此日南風小雨。

同日 朝曇北風 (此日 二百十日) 波浪も減測量可相成。村役人案内に付、五ッ頃九町浦出立。乗船手分。後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、三机浦枝汐成浦の内閣浜より初、汐成浦字フリノ浜人家前より三机本浦へ味迄横切残杭を成、引返しフリノ浜より同三机浦枝川の浜浦砂浜迄測、先手の初へ合測。先手坂部、柴山、文助、善八、川の浜浦砂浜より初、三崎浦枝大久浦を歴て三崎浦枝名取浦字屋敷浜迄測る。先後手共に八ッ頃三崎浦枝大久浦へ着。本陣 組頭葛右衛門、別宿百姓伝左衛門。此夜曇天不測。

同日 朝曇晴。七ッ半前後三崎浦枝大久浦出立。乗船後手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、三崎浦枝名取浦字屋敷浦より初、名取浦 (八家山上にあり。海辺に人家なし) 下を歴て三崎浦枝井野浦字長浜迄測、先手へ合測。先手坂部、柴山、文助、善八、井野浦字長浜より初、井野浦、大佐田浦、佐田浦、高浦 (四浦共三崎浦之枝浦) を歴て、三崎本浦人家下迄測、先手は九ッ頃、後手は八ッ頃に三崎本浦着。止宿 本陣 庄屋小倉部蔵、別宿同人隠宅。三崎浦枝大久浦、名取浦、井野浦、大佐田浦、佐田浦、高浦、三崎本浦、串浦 (山越北地)、松浦 (同上)、明神浦 (同上)、二名洲浦 (旧名、二間津浦 同上)、平磯浦 (同上)、田部浦 (同上)、合十三浦。此夜曇天不測。

同日 晴曇。三手分。三番我等、下河辺、庄作、藤吉、七ッ前二番青木、稻生、佐助、七ッ頃一番坂部、柴山、文助、善八、六ッ後三崎浦出立。

(三番・二番共に乗船) 七ッ頃急に雨降出す。見合なしに測所乗船、六ッ頃雨止。一番は三崎本浦止宿下より初、三崎浦枝串浦地字内之浦 (人家なし。字斗) 迄測、二番内之浦より初 (三の越を北海辺岳ノ上迄横切田を残、本陣 (外人佐田卿という。当国にては御典という) を回り上瀬越を横切、三番オカゴ (嶋とも波石共) 前陣より初、上瀬越を横切 (二番へ続田を残し)。それより二番手の三の越の横切へ繋ぎ串浦 (此浦人家山上にあり、海辺迄測、三番は九ッ頃、二番は九ッ半頃に、一番は内之浦より山越をなし、

八ッ頃に串浦へ着。止宿 本陣 組頭万治郎。別宿百姓又右衛門。本陣詰小倉部蔵、別宿詰庄左衛門、此夜曇不測。

同日 晴曇。南風。先手我等、下河辺、青木、稻生、佐助、朝七ッ半後串浦出立。松浦之内字鯉浜より初、三崎浦枝松浦、明神浦を歴て三崎浦枝二名洲浦人家下迄測 (二名洲浦、旧名二間津浦という)、九ッ前に着。後手坂部、柴山、文助、善八、串浦下海辺より初、三崎浦枝松浦字夜越 (人家山上に五六軒あり。近來の新在家) を過て松浦字鯉浜迄測、先手の残田へ合測、八ッ頃に二名洲浦へ着。本陣 組頭勘左衛門、別宿医師宗見 (此浦、旧は庄屋浦にて、今庄屋屋敷跡ありと三崎浦庄屋小倉部蔵いう)。此夜大曇天。雲間より数星測。付添野田村庄屋準太病氣に付代役八代村直治郎。

同日 晩七ッ頃より大雨。六ッ後に至る。それより小雨。同所逗留。地図を成。五ッ半頃より段々天氣に成。暮に三机浦庄屋菊池宇右衛門来る。三机浦 (真浦)、釜木浦、神崎浦、小嶋浦、志津浦、大江浦、三机浦、足成浦 (北地 七ヶ浦)、汐成浦、川の浜浦 (南地山越 二ヶ浦)、合九ヶ浦庄屋なり。領主参府に此浦にて風波を見合出帆するよし。相応の湊なり。庄屋菊池宇右衛門。領主より永く三人扶持給るという。此夜晴天測量。

伊能図探究 第十三号

伊能日本図探究会 渡辺 一郎

伊能図大発見

(十月二十六日各紙既報・本号二三頁参照)

国会図書館の伊能図

国立国会図書館は、地図室および古典籍室に、これまで伊能図六舗を所蔵してきた。

(地図室)

文化元年沿海地図小図(二二六×二五六センチ)

伊能測量当時の若年寄堀田摂津守旧蔵品で、堀田文庫の印がある針穴本。「伊能日本実測小図(一)」と題する。陸軍文庫の印もあり、同文庫にあったものが戦後国会図書館に移った。虫穴が多いが、彩色、文字など丁寧な仕上げで、付表、識語も完備する。沿海地図小図の優品である。堀田摂津守の旧蔵品で、針穴があるから、伊能忠敬からの謹呈品と推測される。文句ない副本である。折本。

文化元年沿海地図小図(二二四×二五六センチ)

伊能測量当時の勘定奉行中川飛騨守旧蔵品で、蔵書印がある。針穴のない写本。「日本沿海分間図 官撰 東国完」と題する。堀田図とは差があるが描図は丁寧である。彩色・描画形式は堀田図とやや異なるので、堀田図の写図ではない。余白が広く黄色を多く使う。神戸市立博物館蔵の沿海地図小図と同系統の描画である。市中より購入された。折本。

文化六年四国沿海図小図(五五×一〇五センチ)

文化五年の四国測量完了後、提出された小図である。「伊能日本実測小図(二)」と題する。陸軍文庫の旧蔵品で、沿海小図とセットで保管されていたもの。陸軍文庫以前の所蔵者はわからない。

描画・彩色とも優良な針穴本である。経線がなく、緯線を○・五度間隔に引く。虫・傷は少ない。伊能測量に近い関係にあった諸侯の旧蔵品ではなからうか。文化六年の四国沿海図小図の現存は、目下のところ、本図だけしかわかっていない。

(古典籍室)

カナ書き特別小図(一一三〇×一一四センチ)三舗

蝦夷、東日本、西日本の三舗からなる。三舗とも同一寸法である。

標題は、「昌平校旧蔵 日本図」とある。蝦夷図と書いてあるのを朱筆で日本図と訂正してある。

高橋景保の製作で、シーボルトに渡されたが取り返したものであるという。蝦夷図は樺太と北海道を、東日本は尾張以东を、西日本は伊勢以西を描く。縮尺は小図の半分の八六万四千分の一。地名、国界、主な山岳と河川のみを記入、余白が多い。(伊能忠敬研究二一号参照)

幻の伊能大図が発見される

ところがこれらの国立国会図書館の伊能図に、最近新発見の最終版伊能大図模写図四三枚が加わることとなった。最終版の大図は二二四枚であるが、大部分が失われており、これまでに存在が確認されたのは、若干疑問があるものまでいれて、つぎの二二舗にとどまっていた。

国立歴史民俗博物館 写本三舗 (飯山、赤穂、岡山)

山口県文書館 副本七舗 (赤間関、小郡、三田尻、奈古村、

熊毛玖珂、八代島、島嶼)

付図 このたび発見された伊能大図一覧

保柳睦美「伊能忠敬の科学的業績」331頁の伊能大図番号一覧表に表示した。



参考 作成時期別の伊能図一覧表

渡辺一郎作成©一九九七

作成年度	対象地域など	大図	中図	小図	特別地域図	特別小図	特別大図	江戸府内図
一八〇〇(寛政一二)	第一次測量の地域の蝦夷地東南岸と奥州街道。	二一 (一一)		一 (一)				
一八〇二(享和二)	第二次測量地域の伊豆、相模から本州東岸と蝦夷東南岸。尾張、越前以东の日本東半分の沿海と主要街道。日本東半部沿海地図(略稱沿海地図)という。	三二 (〇)	四 (四)	一 (〇)				
一八〇四(文化元)		六九 (六九)	三 (三)	一 (一)	特別地域図の縮尺は区々である			
一八〇七(文化四)	第五次測量地域の畿内および中国沿海。特別地域図は嚴島天の橋立、琵琶湖を描く贈呈用の大縮尺の図。		二 (二)		三 (三)			
一八〇九(文化六)	第六次測量地域の四国および大和図。	二三 (六)	一 (一)	一 (一)		特別小図の縮尺は小図の½		
一八〇九(文化六)	幕府の要請で高橋景保が未測量地域を他の資料で補って暫定的にまとめた日本全図。					一 (一)		
一八一(文化八)	第七次(九州第一次)測量地域の九州東南部。	二一 (三)	一 (一)	一 (〇)				
一八二五(文化一二)	第八次(九州第二次)測量地域の一部。	八 (八)					縮尺は 1:12,000	縮尺は 1:6,000

一八二六(文化一三)	第九次測量地域の伊豆東岸および伊豆七島図	(一)	(一)				(七)	
一八二七(文化一四)	第十次測量でおこなわれた江戸府内の大縮尺図。		(一)					(二)
一八二一(文政四)	全測量結果を総合した最終版上呈図(大日本沿海輿地全図)	二二四 (五七)	八 (八)	三 (三)		二 (二)		
一八二四(文政七)	特別小図の改訂版(日本地理測量之図、同一縮尺の日本東半部沿海地図とセット化)							
一八二六(文政九)	特別小図の描図範囲に北海道・樺太を加え、カナ文字で記した図。					三 (三)		
一八三二(文政五)	大阪より長崎に至る海路の兩岸を示す(西国海路図)	五 (五)						
(合計)	四四〇(二〇四)枚	三八九 (一五五)	二五 (二五)	八 (六)	三 (三)	六 (六)	七 (七)	二 (二)

注1 () のない数値は作成数、() 内は現存数である。調査時点は一九九七、一〇、二五現在である。

2 作成数・現在数は、左記文献を基本とし、その後の調査で判明した事項を追加した。

大谷亮吉「伊能忠敬」五九七頁より六一四頁 大正六 岩波書店

渡辺一郎「最近における伊能日本図の所在と概況について」地図 第三四卷二号 一九九六

3 個人所有で確認の難しいものは除外した。

4 同一の図が複数枚あるときは、二枚目以降はカウントしない。

松浦史料博物館 副本六鋪（松浦、長崎、五島、小値賀、杵岐、平戸領）
海上保安庁水路部 模写図六鋪（安芸、筑後・日向、肥前・肥後、

豊後二、豊後・日向）

京都大学附属図書館蔵 針穴本七鋪（平戸、五島二、屋久島、

種子島、杵岐、対馬）

（注）明治以降の複写図を模写図とした。図の描画範囲が最終版に一致しないもの、製作途中の試作らしきものもあるが、それらもすべて含めた。

それが四十三鋪出てきたのである。まさに大発見である。今回、明らかにった最終版大図の発見は、気象庁所蔵の江戸府内図北部二鋪を、気象庁から国会図書館に移管する途中で起こった。

国会図書館特別資料課長の鈴木純子氏（本会会員）が移管の話し合いのなかで、「このような地図もありますが御覧になりますか」と云われ、大東の包を開いてみたら、伊能大図の模写図であったという。国会図書館に移管されてから、筆者は、佐原市教委の青木氏とともに、確認のため四十三枚すべてを開いて点検したが、針穴はないものの、丁寧に何人かで筆写されたもので、間違いなく、これまでに見えてきた最終版大図と同じであった。しかも、描画範囲は大図の一覽表とよく一致している。なかに一枚だけ、国立歴史民俗博物館の大図と完全に重複するものが見られた。

これまで、人に知られることなく所蔵されてきたため、なかのほうに巻き込まれていた図は開かれた形跡がすくなく、新品同様であった。あまりにもミステリアスな話なので愕然とした。

地図、包装材に記録らしいものは全くなく、推測の域をでないが、本図はつぎのような経過をたどったものではなからうか。

明治六年二月に、伊能家から内務省地理局が最終版伊能図を借り出

して（後に献納、三百円を下賜）写したことが、旧陸軍参謀本部の陸地測量師・館澤彦（一八七一から一九〇五まで測量に従事、一九二七没）の日本測量野史稿（師橋辰夫「地図」九巻一号、一九七二収載）に記されている。師橋氏によると、館は、はじめ内務省地理局にいて、一八八四年に三角測量が陸軍に移管されるのにもない、参謀本部に移ったという。地図作成は内務省で始められたが、途中で旧陸軍にうつされ、そのとき人員・器材の大部分は陸軍に移った。

ただ、一部の要員が、気象台関係に残り、戦後気象庁へと発展してきたようである。これらの人達のなかには地図作りをやりたかった人々もいたのではなからうか。あるいは、伊能大図を写したのはそういう人達だったかも知れない。気象庁はいまでも伊能図の他にも可成りの古地図を所蔵している。

本来は陸軍に引き渡すべき大図の写図をソット目立たぬ場所にしまつて置いて、事情を知る人がいなくなり、そのまま置き去られたのではなからうか。あることが知られていないのだから、見る人はいない。そのため、新しいまま今日に至ったのではないか。

なかに一枚（飯山）、国立歴史民俗博物館の所蔵図と等しい図があるから、写図されたのは複数枚で、その一部が残されたとも考えうる。発見された伊能図は大図であるから、測線周囲の描写は繊細で、富士山の山容、大山の参道の町並み、房総海岸の沿岸風景などが測線の位置までリアルに描き分けられている。

発見大図の番号は二九頁のとおりで、関東を中心に奥州南部から信越まで、東日本中央部を網羅して壮観である。参考のため、三〇・三一頁に作成時期別の伊能図一覽表を掲げた。

（本稿は国会図書館・鈴木特別資料課長、戸澤古典籍課長と立ち会い調査の際の資料、見聞にもついた私見である。）

伊能忠敬研究会入会案内

一、本会は、つぎのような活動をおこなっています。

(一) 会報の発行(当面、年四回)

各号三六頁。伊能図探究を継承するので、初号は第七号から。

(二) 年次大会・例会の開催

年一回の年次大会と例会を開催します。一般講演、各種の発表のほか史料、伊能図の展示説明等を併催します。

(三) その他付帯する事業。

投稿規定

・会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお任せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

・一頁は、二段組三十一字×二六行×二段で一六一二字、三段組二〇字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこれの中に含めてください。また、提出した原稿の返却は致しません。

二、入会方法、会費等

(一) 入会申込は、住所、氏名、職業、専門、電話番号、FAX番号などを書いた申込書を左記にお送りいただくとともに、小為替または銀行送金等で年会費六千円を御送金下さい。

(二) 申込先 〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の五〇四
飯田橋ハイタウン五〇四

伊能忠敬研究会(事務局 渡辺 一郎)

(三) 送金先 郵便振替口座 〇〇一五〇・六・〇七二八六一〇
伊能忠敬研究会あて

三、本誌の編集委員はつぎの各氏にお願いしております。

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取樽良(前佐原市教育委員会教育次長)・小島一仁(佐原市史編集委員)・斉藤 仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭、法政大学講師)・芳賀 啓(柏書房取締役編集長)・渡辺 一郎(伊能日本図探究会代表、会社会長)
(五十音順)

四、会員で会報の追加希望は一部五〇〇円としました。

編集後記

●青森、新潟、京都、神戸、島根、福岡からも駆けつけた「忠敬友だち」。初参加の会員、特別参加の方々合わせて五十名。個人ではなかなか行かないコースも好評。お天気良し、全員無事、ツアー担当者はホッと安堵の例会でした。(伊)

●お詫びと訂正

前夏期十二号に、重大なミスが四か所もありました。訂正して深くお詫びいたします。

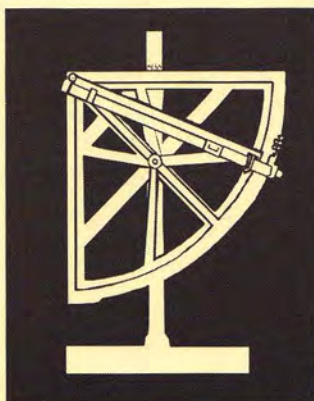
白根貞夫氏の『例会に出席の記』の記事中、六頁下段「小生には陸測図が千枚弱あるが」を「七千枚弱」に、「しまい場所」を「住む場所」に、「今井金吾氏の『今昔東海道旅案内』を『独案内』に、七頁下段「出版まで六年」を「十六年」に、それぞれ訂正いたします。

白根・河島氏に大変ご迷惑をかけました。以後注意致しますので、これに懲りずに、御投稿お待ちしております。(あ)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.13 Autumn 1997



ESSAYS

The Romantic Person	KOGA Nobuo	1
As a master of pacing off	KANBE Nobukazu	2
Trans-Japan on foot	OKABE Takako	4

TOPICS 1

Tokyo Citizens College	MAEDA Yukiko	7
Tomioka Museum	ASAI Kyoko	7
INO TADATAKA Campaign	EDITORIAL Staff	8
The Party Celebrating The Publication of Mr.Watanabe's book	SUDO Ikuo	9

MATERIALS

Family Document		
Onobu-san	ANDO Yukiko	10
Hakosojo	INO Yoko	14
Regional Materials		
ASAKURA Konai an artist employed by the Tokuyama clan	ITO Eiko	18

TOPICS 2

Sign of new vogue words.....	HOTTA Kiichi	21
Newspaper Account		22

INO'S Land Survey Diary

The Sixth Survey Diary (6)	SAKUMA Tatsuo	24
----------------------------------	---------------	----

THE SEARCH FOR INO'S MAPS	WATANABE Ichiro	28
---------------------------------	-----------------	----

OTHER NEWS		33
------------------	--	----

Edited and Published
by
THE INO TADATAKA SOCIETY